

高橋良雄さんの

及位の昔話(四)

編 山形民話の会・武田 正

高橋良雄さんの

及位の昔話 (四)

山形民話の会
武田正

高橋良雄さんの
及位の昔話
(四)

- | | | | | | | | | |
|------------|---------|-------|--------|-------|---------|-------|---------|------|
| 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ろぐであえの地藏さん | 地藏さまむがし | 地藏むがし | 爺つつあど鼠 | しびたれ男 | 鬼婆んばむがし | 鬼婆むかし | 鬼婆んばむがし | 鬼婆んば |

六三	五五	四六	四二	三七	三二	二四	一二	五
----	----	----	----	----	----	----	----	---

16 15 14 13 12 11 10

六地藏さま
孝行息子
ごげかがむがし
ごげかがむがし
ごげかがむがし
桃太郎
桃太郎

六七
七三
八〇
八五
九四
九八
一〇五

高橋良雄さんの原稿によるもので、
許可を得て山形民話の会にて印刷し
たものです。

1 鬼 婆 ん ば

むがしあつたけど。あるづぎなあ。小僧^{こんぞ}こあ、和尚^{おす}さんの使いで、及位^{のぞぎ}のこしぎ峠^え越えで、矢島^{やじま}さ行ぐごどんなたけど。矢島^{やじま}ずあ遠えおんだはげあえ、峠^え越えだら、日^くあ暮^くつでしまたけどは。

ほんで、困てしまて、何処^{どこ}が泊^{あがし}めでくえつどこあねあんだが、て、先^あさ行^めたけど。ほしたら、向^あうにぽつんと、灯^{あがし}あ見^めつけけど。ほんで、小僧^{こんぞ}こあどつかどして、よろごで、泊^あめでもらうべと思^もて、ほごさ行^えたど。ほうして、

「お晩^へです、お晩^{ありぐち}です」

て、戸^へただえだら、入^{ありぐち}口の戸^{ありぐち}がらつと開^あげで、婆^あさま出^あはて来^あたけど。ほんで、小僧^{こんぞ}こあ、婆^あさまどさ、

「矢島^{やじま}さ行^あぐなだども、暗^あくならつだはげあえ、泊^あめでもらわんねべが」

て頼^あだど。ほしたら婆^あさま、

「でやでや。とまれとまれ」

て泊めでくっただけど。ほうして、飯まもごつつおして、奥の座敷さ寝へでくっただけど。

小僧こあ、寝でがら夢見だけど。枕もどさ弘法大師さま立って、「小僧、小僧、おめあえどさお札三枚めあえさずげでえぐ。困たごどでげだら、このお札さ頼め」て、お札三枚、小僧こあ枕もどさ置ぐど、お姿すうつと、見ねぐなたけどは。

ほんで、小僧こあ、はつと思たら、目あ醒めだけど。ほうして、枕もど見たら、本ほん当たんお札三枚あんなだけど。

小僧こあ、ありがであぐなて、「南無阿弥陀佛なんまみだぶつ、南無阿弥陀佛」て拝んでだば、なんだが水屋みじやの方で、じやりつ、じやりつて何が磨ぐよんた音あすつずおん。

小僧こあ、婆さま、この夜中ん何しったおんだべど思もて、戸のすぎまこから、そつとのぞえでみたど。ほうしたば、鬼婆んば、

「あの小僧こあ、んめあえそだ。あの小僧こあ、んめあえそだ」
て言ゆいながら、包丁ほえじよとえんだなだけど。

小僧こあ、おかねぐなて、おかねぐなて、ふるえながら、なんずんして逃ねげだ

らえて考^{かん}げあえだど。ほうして、便所^えさ行^えぐふりして逃^ねげねんねど思^もて考^{かん}だど。ほうして、座敷^{ざしき}の戸^{かど}あげだど。ほしたば鬼婆^{おにばあ}んば、戸^{かど}あぐ音聞^{おとをき}ぎつけで、

「小僧^{こそう}、小僧^{こそう}、どさ行^えぐ」

つけど。ほの顔^{つら}のおかねごど、髪^{かみ}あやしややしてんべし、口^{くち}あ耳^{みみ}んどごまで裂^ひげで、眼^{まなこ}ぎよろぎよろ光^{ひかり}らへで、にらむなだけどや。小僧^{こそう}こあ、おかねくてふるえながら、

「くそでだぐなたはげあえ、便所^{へんつん}さえぐなだ」

て言^ゆたば、鬼婆^{おにばあ}んば、

「んだが。んであしつとえあまで」

ていうど、長^{なが}んげあえ細^こびぎ持^もてきて、ほれ小僧^{こそう}こあ腰^{こし}さつねで、端^{はち}の方^{かた}おわ持^もて、便所^{へんつん}さ行^えがへだけど。

小僧^{こそう}こあ、ほの細^こびぎ引^ひぎつて便所^{へんつん}さ行^えたど。ほうして、便所^{へんつん}さ行^えぐど、弘法^{こうぼう}大師^{だいし}さま、こ^こうい^いう困^つた時^{とき}使^{つか}えて、お札^{お札}くつだあだなて思^{おも}い出^でして、お札^{お札}一枚^{いちまい}しとご^ごろ^ろがら出^でして、お札^{お札}さ、「ど^どう^うが、おれ^{おれ}あ逃^ねげるま^まで、ま^まだ^だだ、ま^まだ^だて言^いてこ^こ」

ろ」て頼で、ほのお札細びぎさつねで、便所がらんどど逃げで行たけど。

ほれがら、少すおもうど、鬼婆んば、

「小僧、小僧、まだが」

ていうけど。ほしたればお札あ、「まだだ」て言てくつだど。ほうして、またすばらぐすつど、鬼婆んば、

「小僧、小僧、まだが」

ていうけど。ほうすつどお札小僧こあ代りんなて、「まだだ」て言てくつだけど。ほうして、またすばらぐすつど、

「おそえちやな小僧、まだか」

ていうけど。ほうして、まだすばらぐおもてがら、鬼婆んばごしえで、

「なえだておそえちやな小僧」

ていうずど。ほの細びぎくえら引ばたけど。ほしたば、ほの細びぎあ軽々どこつちや引ばらつできて、細びぎの先さお札つたばんだけど。んだべや、小僧こあ、細びき解えで、さっさど逃げでしまたんだおん。

ほうすつど鬼婆んば、顔つらんね顔して、

「小僧逃げだな」

ていうど、小僧こあどごぼかげて行たけど。小僧こあ、一生懸命けめなて逃げだども、鬼婆んば早はえおんで、ほのうづ追かつがれそなたけどは、ほんで、小僧こあ、二枚目にんめあえめのお札、おわうすろさ、ぐえら投げで、

「おれあうすろさ、大つき川ではれ」

て叫さかだど。ほうしたば、小僧こあうすろさ、大川出来でだけどや。鬼婆んば、

「小僧、までー。小僧、までー」

て、おつかね声出して追ほてきたども、大川出はたけどや。鬼婆んば、

「小僧、までー。小僧、までー」

て、おかねあ声出して追ほてきたども、大川出はたべ。ほうすつど、鬼婆んば、

「この畜生、この畜生」

ていいながら、じゃぶじゃぶど、なんぎして川こえでくつけど。ほのこめん小僧こあ、まだどんどど逃げだど。ほうしているうづん、鬼婆んばようやく川渡で、

まだ、

「小僧、までー。小僧、までー」

て追^ほてきたけど。小僧こあ、おかねくて、おかねくて、どんどん走して逃げだべ。んだて鬼婆んばだべ。早^はえおんで、早えおんで、小僧こあ、まだかつがれそんなたけど。ほんで小僧こあ、まだうしろさお札投^なげで、

「俺あうしろさ、大つき砂山出はれ」

て言^ゆたど。ほうしたば、小僧こあうしろで、大つき砂山ではたけどや。ほうすつど鬼婆んば、

「この畜生^{ちきしよ}あ、こんだ砂山が」

て言^ゆいながら、砂山さ登てえぐけど。んだて砂山だべ。一足登つど、ざくざくつと崩れ、一足登つど、ざくざくつと崩つで、ながなが登れねけど。

ほのうづ小僧こあ、まだ、今^{いま}のうづだていうど、一生懸命なて逃げだど。ほんでもほれ鬼婆んばだべ。荒れあおんで、あれあおんで、まだ、砂山越えで、

「小僧までー。逃げだてだめだぞ、こらまでー」

て、おかね声で叫がびながら、まだ、追て来たけどや。

こんだ、お札もなくなたべ。んだはげあえ、小僧こあ、おかねくておかねくて、死にものぐるいで走したあだど。んでも、鬼婆んば、小僧こあうするがら、

「小僧までー。小僧までー」

て、どこまでも追て来るおんで、まだは、小僧こあ、かつがれそなたけどは。ほうして逃げだども、^{こわあえ}疲ぐなて、小僧こあ、蓬どしようぶのある草やらで、つまづでしまてころでしまたけど。ほんで、しかだねあえ、小僧こあ、ほの蓬どしようぶの草やらさ、すぐだまで、かぐつでいだど。

ほうしたば、鬼婆んばあ、ほのやぶの近ぐまで来たども、ほのやぶやらみで、「蓬どしようぶのやぶやらさかぐつだがは、ほれだば、なんずもでけねあえ」どて、山さ戻て行くけどは。

んだはげあえ、今も、五月節句にあ、魔除げだて、軒さ蓬どしようぶ差すよなたあだど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

（話者 高橋良雄）

2 鬼婆んばむがし

むがしあつたけど。

ずうつとむかしなあ。あるどさ、爺さまど婆さまいだけど。二人あ子供あいねあ
おんだはげあえ、何時も子供一人おしなて謀べていつがったど。

ある時、爺さまあ山さ行たば、道端さ赤子おぼこあおがつて泣っただけど。ほん
で爺さま、

「なえだべ。こんたどさ赤子あいだじゆ。誰あ置えで行たおんだべ」

て、あたり見だども、誰もいねあし、ほのうづん来んべど思て待ちっただど。ほ
んでも晩方なても誰も来ねあじゆおん。んだはげあえ爺さまあ、おぼこ欲して、
何時も喋ていだはげあえ、神さまさずげでくつたなだべど思て、ほの赤子自分家さ
抱で来たど。

ほうして、

「婆さま、婆さま。先ず見ろ。めんごげだ赤子おぼこ拾ろて来た」

て、婆さまどき見へだど。ほしたば、婆さまどでて、

「なえだどや爺さま。本^{ほん}当^{たう}だがや」

て、水屋^{みじや}がら出^ではて来^きたけど。ほうして、爺^{でえ}さま抱^だつたおぼこ見て、

「なんだてめんごげだおぼこだごど、えがつたな爺^{でえ}さま」

て、うんと喜^{よろこ}だけど。

ほうして、二人^{ふたり}して大^で事^あんして育^{であえ}でだずおん。ほのおぼこあ、女^{おな}子^ごわらすこだ

けど。ほうして育^{であえ}でいるうづん、ほの女^{おな}子^ごおぼこあ、だんだん大^おつきくなたべ、

ほうして、十二、三^{さん}ぐれあえなつど、婆^おさま水^み屋^や仕^し事^じしろ、ほら庭^え掃^はげ、ほら家^えの

あだりの草^{くさ}むすれて、使^{つか}うようになて、十五、六^むんなつど、こんだ、田^いの仕^し事^じだ、

畑^はだて、こぎ使^{つか}うよんなたけど。んでも、ほの女^{おな}子^ごわらすこあ、はえはえて何^{なん}で

も一^{いっ}生^{せい}懸^{けん}命^{めい}なてすつけど。

ほうしているうづん、十七、八^はんなて、ええあねこんなたべ、ほうすつど、婆^お

さまあ、朝^あまあ、こ早^{はや}くから起^おして働^{はたら}がへるし、夜^よんまだ夜^よんまで、水^み屋^やしめあえ

はさへる、ほれあ終^はつど、洗濯^{せんたく}しておげ、ほら着^き物^{もの}のほごろび縫^ぬえ、ほら下^{した}着^ぎ縫^ぬ

え、爺さま着物縫えて、夜んまもろぐん寝へねあえで使うなだけど。んでも、大人しあねこで、まずまずは、わり顔つらしとつ見へねあえで、何時でも、はえはえて働くあねこだけど。

ほのうづ、あねこもえあんべあえの年だべし、爺さまど婆さまあ、孫見であえぐなたあだど。ほんで、賀もらわねあんねあていうなで、賀さがししたど。ほうしてさがしたば、ここだば、中田みであえんた所どさ、弥兵衛てええ若者わがえおのいだけど。

ほんで爺さまあ、弥兵衛家えさ行て、

「どうが、弥兵衛さんどご、俺あ家さ賀んくつでくんねあべが」
て頼んだら、弥兵衛えの親爺さまあ、

「んだが、んだが、んでも、お前家めあええのあねこあどごあまだ知らねあがら、弥兵衛どご、お前家さやてみで、弥兵衛あ、えてゆえばあげあす」

つけど。ほんで爺さまあ、弥兵衛あどご、自分家あつつこつつ見へだど。ほうしたば、弥兵衛あ、賀ん来るていうけど。

ほんで、弥兵衛あどご聾んもらて暮しつたど。んでも、婆さまあ、あねこあどごき使うな、けあえてひどくなたけど。先づは、本当ん、夜んまもろぐん寝らんねあえくれあえだけど。ほんで、あねこあ困て困て、

「俺せあえも家えにいねばえなだべ。これだばとても家になのいらんねあえは」
ていうなで、とうどう、家出でしまたけどは。

あねこあ、家出だども、行くどごあねあえべ、仕方ね、何処だていうあでねあえぐ歩ありて行たど。ほうして歩てるうづん、暗くなてしまたけどは。んだはげあえ、向うさ灯あ見めつさげあえ、ほごさ行て泊めでもらうべと思もて、ほごの家さ行て、

「お晩です。お晩です」

てゆたば、婆さま出はて来たけど。ほんで、

「道迷てしまて、暗くならつたはげあえ、今夜こにや一晚泊めでもらわんねべが」
て頼だど。ほしたば、婆さまあ、

「でやでや。ほれあ困たべ。泊まれ泊まれ」
て泊めでくつただけど。

ほうして、泊めでもらて、奥の座敷さ寝へでもらたど。ほしたば、夜中ん夢見だけど。白え着物きた神さま、あねこあ枕元さ来て、

「あねこあねこ。困るごどあ出来^でだら、櫛ど、草履ど、手拭きたのめ」
ていうけど。ほうして、すうつと見ねぐなてしまたけどは。

ほのうづ、目あ醒めだけど。

「何^{なえ}だておがし夢だおんだ」

ておもたど。ほうしていだら、水屋の方で、じやりつ、じやりつて包丁^{ほえじよ}でも磨ぐよだ音あすつずおん。

「なんだべ、この夜中ん包丁^えなの磨ぐよんた音あするおんだ」

て、水屋の方さ、そつと行^えてみだど。ほしたば、髪やしやしやして、口なの耳んどごまで裂^さった鬼婆^{きわ}んば、大つき包丁磨ぎしつたなだけど。あねこあ、どでして、どでしてしまて、

「これだば、だまてつど鬼婆^かんばに食^かつでしまうばんだは」

て、おかねあぐなて、おかねあぐなて、そつと逃^ねげるかんじよで、草履^{じようり}つつか

げで出はたど。ほうして、入口へあえりぐちの戸開げつだば、たでづけあえぐねあくて、戸あ、
がだがだて音あすつけど。ほしたば、ほの音聞で、鬼婆んば、

「このぼっこ逃げだなつ」

ていうど、「このぼっこあ待でー、このぼっこあ待でー」て追ぽかげで来たけど。

あねこあ、おかねあくて、おかねあくて、命がけんなて逃げだど。んだて鬼婆
んばだおんだおん。早はえおんで、ほのうづかつがれそんなたけどは。ほうすつど、
紳さま困づきた時あ櫛づきさ頼めて、このごどだなど思もて、自分おわ頭さ挿おわしつた櫛とて、

「俺あうすろさ、むぐらんねあよだ柴やら出はれつ」

ていうど、ほの櫛、自分うすろさ、ぐえつと投げだど。ほうしたば、あねこあ
うすろさ、たちまち、むぐらんねあよだ柴山出はたけど。

ほんで鬼婆んば、

「あらつ。こんた柴めあえやら出はたじゆは。」

て、柴山の前めあえで、うろうろしつたけども、

「なんだ、こんたおのあ」

ていうど、むりやり、がさがさめがして、むぐり始めだけど。んだてながなが
むぐらんねあがったど。んでも、ほれ鬼婆んばだおんだおん、荒^{あれ}あくて、てまか
がて、がさがさどむぐっけど。ほうして、漸ぐむくて、まだ、

「ぼっこ待でー、ぼっこ待でー」

て追^ほかげでくんだけど。

あねこあ、おかねあくて、おかねあくて、どんどん逃げだど。んだて鬼婆んば
だおんだおん、早^はえくて、早^はえくて、ほのうづん、まだ追^{かつ}がれそんなたけどは。
ほんで、神さまに教へらっだよん、自分履^{おわへえ}っだ草履脱えて、

「俺あうしろさ、大つき岩山出はれっ」

ていうど、ほの草履、自分うしろさ、ぐえっと投げだど。ほうしたば、人^{ひと}なの
登らんねあよだ岩山出はたけど。ほうすっど鬼婆んば、

「なんだて、こんだ、こんた岩山出はりあがたっ」

ていうど、今^{こんだ}度、ほの岩山の柴なの、つたさなの手かげで、うんうんうなりな
がら難儀して、ほの岩山越えて、

「こらー、ぼっこ待でー、ぼっこ待でー」

て追^ほかげで来たけど。

あねこあ、おかねあくて、おかねあくて、どんどん逃げだど。んだて鬼婆んばだべ、

「ぼっこ待でー、ぼっこ待でー」

て、どこまでも追かげでくつずおん。ほうして、まだ、追^かつがれそんなたけどは。ほんで、あねこあ、神さまの言^ゆたとおり、今度あ、腰^{こす}さはさんだ手拭とて、

「俺あうしろさ、大つき川出はれ」

て、ほの手拭^{ぬげ}、自分うしろさぐえつと投げだど。ほうしたば、今度あ、大つき

川出はたけど。鬼婆んば、

「なんだて、きしやわりちや、今度^{（あ）}あ川がは」

ていうど、ほの川さじやぶじやぶど入^あえて行て、川こぎ始めだけど。んだて大つき川なおんだおん、なんぼ鬼婆んば荒^{あれ}あて、ほんげあえ直ぐなの越えんねあべ、んだおんだはげあえ、鬼婆んば手間とてゐるこめあえん、あねこあ、どんどん逃げ

で行たど。

ほうして、命がけなて、ずうつと逃げてえたば、お寺あつけど。ほんで、あねこあ、わらわらどお寺さ行て、

「和尚さん和尚さん、まづ早ぐ助けでころ。鬼婆んばに追わつで、漸ぐここまで逃げで来たあだ。ほこん所^{ところ}まで追て来たあだはげあえ、まづまづ早く助けてころ」
て言^ゆたば、和尚さん、「んだが」ていうど、あねこあどこ、しやみ壇の下さかくしてくつだけど。ほごさ鬼婆んば、

「和尚、和尚。今、此処さぼつこあ一人逃げで来たはんだ、何処^{どこ}さかぐした。出さねあえどお前^{んつ}どごも食うぞ」

て、鬼婆んば来たけど。ほんでも和尚さん知らね振りして、

「誰も来ねがったな。其処^{ほこ}らあたりさがしてみんだ。来たが来ねが分るんだはげあえ」

ていうたおんだはげあえ、鬼婆んば、

「来ねが。来ねば仕方ねあ。どっちさ行たべ」

て、鬼婆んば、行くかんじよしたけど。ほんで、和尚さん、

「待で、待で。折角^{へつかく}来たあだ。俺ど化^えげくらべして行^えげ。俺より上^{じょん}手^てだば俺あど
ご食^かへる。どうだ」

て言^ゆたど。ほしたば鬼婆んば喜^ゆごで、

「んだが。ほれも面白^{めあえ}へ。んであすつが」

つけど。ほんで和尚さん、

「んであ、まず、お前^{めあえ}化^えげでみろ」

て言^ゆたば、鬼婆んば、

「んだが。んであ、何でもなっさげあえ、ゆてみろ」

ていうけど。ほんで、和尚さん、

「ほつが、んであ、てんとう虫^ちんなてみろ」

て言^ゆたべ、ほんで鬼婆んば、「ほつが」ていうど、小^ちつちえあてんとう虫^ちになた
けど。ほうすつど和尚さん、「今^{いま}だ」ていうど、傍^{わらわ}の木魚^{ぎょ}ただく棒^{ぼう}たがえで、ありつ
たげの力で、鬼婆んばの化^えげだてんとう虫^ちただぎづけで、殺^{ころ}してすまたけどは。

ほれがらな、和尚さん、しゃみだんの下がらあねこあどこ出して、あねこあどさ、

「鬼婆んば、俺に殺さつたはげ心配すんな」

て教へで、

「あねこあねこ。お前、何処どこから来たや。ないだどて鬼婆んばいるよだどさ行たおんだや」

て聞だど。ほんで、あねこあ泣きながら、

「実ずあ、こういう訳で、あんまり婆さまあ、俺あどごいづめるおんだはげあえ、俺せあえもいねばえべど思もて、何処どこさ行くあでもねあえぐ、自分家えがら出はて来なであえす」

て教へだけど。ほしたば和尚さん、

「うう。むぞせあえどごもある。んでも、ほれだばお前めあえ考げあえ浅せあえ、世の中にあ、神さまもいれば、仏さまもいる。神仏ずあ、誰あどごでもちやんと見でくえるおんだ。お前めあえ、婆さまどごうらみながらなの、なんば一生懸命なて働あえ

だたて、婆さまさ、お前の心なの通ずるおんでねあ。年とた婆さまあ婆さままで、年なりに一生懸命なて働あえでいるおんだ。お前婆さまどごかばう氣持あねあくて、ただ、俺ばり難儀しねあんねあ、いっさげあえ駄目だなだ。ええが、今度あ婆さま婆さままで、婆さまどごいだわてやれ。ほれがら、このまんじゆくつでやる。

これ持て行て、今日あ、お寺詣りして、このまんじゆ、和尚さんがら、うんとご利益あるまんじゆだけあえ、必ず婆さまどさも食へろ。て、くれぐれも言わつてきたあだてな。ほうしてなあ、家だまて出はて来て、心配かげで申訳ねあがつたども、夢でお告げさつで、家の人達さだまて出はて、お寺参りしてこねあば、ええわらすこあ生んねあぞ。てゆわつたおんだはげあえ、だまて出はて来て、本當申訳ありあへんでしたて、行けよ」

て、和尚さんに、こんこんどさどさつたおんだはげあえ。あねこあ、漸ぐ分がて、自分本當の誠心で親達さ仕えねがつたがらだ。今度あ家さ帰たら、必ずみんなさ同じ心であだらねあんねあて分がたけど。ほうして、和尚さんさ、えつくんお礼申して家さ行たど。

家さ行たば、家内中、どさ行たべて心配しつたけど。ほんで、和尚さんに教へらつた通り言て、皆さ心配さへでて、詫び言て、貰てきたまんじゆ、一番先ん、婆さま食へだあだど。

ほしたば、婆さま、ありがてあえまんじゆだて拝んで、ほれこそ喜^{しつやわ}ごで食つたけど。ほれがらじゆおのあ、皆いだわりあうよん^{しつやわ}なて、うんと幸福ん暮すよん^{しつやわ}なたけど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋久雄)

3 鬼 婆 む か し

むがしあつたけど。むがしな一、或る所さ、お寺あつたあだど。ほうしてな、其処のお寺の和尚さがな一、お盆の十三日も間近になたんだし、盆花とてあげねあんねあどもて、小僧どさ、

「小僧、小僧、十三日もすぐだはげあえ、仏さまさ盆花あげねあんねあ。山さ行てとてこえちや」

て、小僧どさ、採りん行がへだど。

ほんで、小僧あ、山さ盆花採りん出がげだど。ほうして山で、もう少すもう少すというなで、だんだん山奥さ入へて行て、一生懸命なて採てるうづん、日あ暮つでしまたけどは。困てしまて、あつこつ見だども、家えあ一軒見ねあおんだはげあえ、もう少す行たら、家ああるおんだんねあべが、ど思もて、ずうつと行たば、ぼつんと灯ああ一つ見つけど。ほんで小僧あ、どつかどして、其処ほごの家さ行て、

「お晩です。お晩です」

て言ゆたば、婆さま出はてきたけど。小僧あ、

「道に迷てしまて、暗ぐならつたはげあえ、なんとが今夜一晚泊めでもらわんねあべが」

て頼たのだば、婆さま、

「ああ、えーえ、入へて来て泊まれ」

て言てくえっけど。んでも、婆さまの顔^{つら}なんだかうす気味^{きび}わりなだけどせあ。
ほんでも仕方ねあ泊めでもらたど。あど、どこにも家なのねあんだおん。

ほうして、夜中んなたば、なんだが、ざあざあていう音あすんなで目さめだど。

小僧あ、なえだておがすな音あするおんだと思て、そつと戸のすぎまが見だら
囲炉裏^{ゆりば}端で、鬼婆んば包丁磨ぎだけど。小僧あ、今度おかねあぐなて、おかねあ
ぐなて、

「これあ大変だ。なんずしたらえべ」

ど思たど。んだて、鬼婆んば、夜中に寝ねあで包丁なの磨えでるなだおん。ほ
んで、なんずしたらえべと思て、うんと工面したど。

ほうして、鬼婆んばどさ、

「婆さま婆さま。まずまず便所^{へんつん}さ行きであえぐなたはげあえ、便所さ行がへでこ
ろ」

て言たど。ほしたば鬼婆んば、

「なんだ小僧、逃げ^ねんなんねが」

つけど。ほんで、小僧あ、

「逃げんななのんねあ。こんた暗闇^{くらすま}ん何処^{どこ}さも行がんねあべな。便所さ行くばんで、逃げんななのんねあ」

て言^ゆたば、鬼婆んば、

「んだが。んだばえ。んでもこれつけで行げ」

て、小僧あ腰さ、縄ゆつけただけど。ほうして、便所^{へんつん}さ行がへただけど。

ほうして、便所さ行て、すばらぐすつど、鬼婆んば、

「小僧小僧、まだ、出ねが」

つけど。ほんで、小僧あ、

「まだ、出あへん」て言^ゆたど。

ほうして、和尚さん^{づぎ}がら、来つ時、お札三枚^{めあえ}もらて、災難さあた時あ、一枚ず

つ撒えで、お札さ頼めて言^ゆわっだな思ひ出したけど。ほんで、一枚しとごろから

出して、便所さ張て、

「鬼婆んば、まだがて言^ゆたら、まだだて言てころ」

て頼たので、自分腰さゆつつけらつた縄、便所の柱はすらさ結つねあで、どんど、逃げで行
たど。鬼婆おんばんば、まだだが、てなんべ言ゆたて、まだだ、まだだていうおんだはげあえ、
こんだ鬼婆おんばんば、かんしゃぐ起して、

「小僧小僧。まだ出ねなて、ほう長んがく出ねあずあねあーべな」

ていうど、ほの縄、ぐえら引張たべ。ほうすつと便所の細え柱つねあさ結つねあんだおんだ
おん、便所あ、がりがりど壊ぼこつでしまたけどは。

ほうすつど、鬼婆おんばんば、

「小僧逃げだなっ」

ていうど、小僧あどさ追おかけできたけど。小僧あ、おかねあくて、おつかねあ
くて、命がげんなて逃げだど。ほんでも、鬼婆おんばんばだおんだおん。早はえくて早え
くて、

「こらー、小僧待でー、小僧待でー」

て追おかけで来て、そんま追おつがれそなたけどは。
ほんで、小僧あ、和尚さんがらもらたお札、まだ、懷しんじろがら出して、

「俺あうしろさ、大つき川出はれっ」

ていうど、ほのお札撒えだど。ほしたば、小僧あうしろさ、大つき川出はたけど。ほんで、鬼婆んば、越えらんねあで、うろうろしたけど。ほのうづん、鬼婆んば、「面倒くせあえつ^{めんど}」ていうど、ほの川の水、がぶがぶど飲み始めだけど。ほうして、一寸のこめあえん^{しつとあえ}、ほの水飲み干してまたけどは。

ほうすつど鬼婆んば、まだ、

「小僧待でー、小僧待でー」

て追かげできたけどやー。ほうしているうづん、小僧あ、又鬼婆んばに追^かつがれそなたけど。ほんで、小僧あ、しどころがら三枚目のお札出して、

「俺あ後さ、しょうぶと蓬の山出はれっ」

て、ほのお札うしろさ投げだど。ほうしたば、小僧あうしろさ、しょうぶと蓬の大つき山出はたけど。

ほのうづ小僧あ、どんどど逃げで、お寺さ行てまたけどは。ほうして、和尚さんどさ、

「和尚さん和尚さん。まづ早ぐかぐしてころ」

て、ふうふうて言いながら言^ゆたべ。ほしたば、和尚さん、まだ、

「ほんげあえふうふて走^はしてきて、いつてあえ、なになおんだや」

ていうおんだはげあえ、小僧あ、

「おつかねあどさ泊りあでよ。山で暗ぐならっだおんだはげあえ、泊めでもらたば、鬼婆んば家だけなよ。ほんで、鬼婆んばに追^ほわつでしまて、今ほごまで追かげできたあだ。まづ早ぐかぐしてころは」

ていうおんだはげあえ、和尚さんが、

「んであ戸棚さかぐつでろ」

て、戸棚さかぐしたど。

ほうしているうづん、鬼婆んば、なんづんしてしようぶどよもぎの山越えて来たおんだが、お寺さ来たけどは。ほうして、

「和尚、和尚。小僧あ来ねあけが」

て聞ぐずおん。ほんで、和尚さん知らねあ振りして、

「ほういう者あ来ねあがつたな」

てゆたば、鬼婆んば、

「来ねあじゆあねあ、必ず^{へあ}入たなだ」

ていうずおん。ほんで、和尚さんが、

「ほんであ、まづ、俺ど化げくらべすんべ」

て言^ゆたば、鬼婆んば、

「ほう。んだが、ほれもえがべ」

ていうけど。ほんで、二人^{したり}あ化げくらべすつごどんしたど。

ほんで和尚さん、

「んであ、なんぼ上手ん化げれつが、まづ、お前^{めあえ}がら化げでみろ」

て言^ゆたば、鬼婆んば、

「んだが、んであ、何に化げる」つけど。ほんで、和尚さん、

「んだなー。んであ、豆^ずこんなてみろ」

て言^ゆたど。ほうしたば、鬼婆んば、暫^{しばら}ぐ口^{くち}ん中で、何がぶづぶづ言^ゆてだどおも

たら、ころころつと、豆こん化げだけど。ほうすつど和尚さん、ほの豆こ、ぺろつと飲^のでやてしまたけどは。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋キク)

4 鬼婆んばむがし

むがしあつたけどー。ある所^どさなー。うんとけちくせあえ男人^{おとこ}あいだけど。ほの人あ、かがに死なつでしまて、困^こまで、あどかが欲^ほしくていであえつたど。ほんでも、けちくせあえくて、けちくせあえくて、自分^{おわ}かがどさせあえも、飯食^{ままか}へんないだまし、どていう男であえつたど。んだおんだはげあえ、誰もあどかがん来てくえるていう人なのいねあがつたど。

ある時、ほの男人あ、峠^まの方さ行て木伐^もていであつたど。ほうして、昼^ちま近^ちけあえぐなたはげあえ、飯^までも食うべと思^もて、腰^こ下ろして、にぎり飯出^ましたら、ほごさ

知らねあねこあ来て、

「お前、飯かねあねこさがしったったんねが」

て聞くけど。ほんで、

「かがん死なつて、困っていたども、出来れば飯かねあかが欲しおんだどもていだども、ほげあえたあねこなの、どごさがしたていねあおんだはげあえ、まだ貰いかねあでいだ」

て言たど。^ゆほしたば、ほのあねこあ、

「んであ、俺あ飯なの食ねで、ただ働ぐばんだはげあえ、俺あどご貰てくんねあが」つけど。ほんで、ほの人あ喜で、

「んであ、どうが、俺あ嫁^{わけあえ}なてくんねあが」

て、ほのあねこ貰て、自分家^{おわえ}さ連^つで行たど。ほうして、二人あ一緒^{えっしょ}んなて暮したども、ほのあねこあ、飯^かなのさっぱり食ねで、うんと働ぐばり働ぐなただ。ほんで、ほの人あ、うんと喜でいであつたど。

んでも、おがしごどにあ、自分家の米あ、自分食うよりうんと早ぐなぐんな

だげど。ほんで嫁^{わけあえ}どさ、

「なして、ほんげあえ早く米あなぐなんなだや」

て聞だど。ほしたば嫁あ、

「鼠あうんといだはげあえ、鼠あ食うなんねがや」

というけど。ほんでも、ほの人あ、鼠なのなんぼ食たてしつだおんだ。なんだ
ておがしおんだと思^もて、ある時^{つぎ}、

「今日あ、仕事でおそぐなつさげな」

て、あねこあどさ言^ゆて、おわ仕事さ行^えぐふりして、こそつと梁の上^{ゆえ}さあがて、

あねこあなたごどするおんだが見つだど。

ほうしたば、あねこあ、五升だぎ鍋さえつぺあ米磨えで、どんどど火たえで、

ほの鍋かげで、囲^{ゆるり}炉裏で飯たぎ始めだけど。ほの人あたまげで見つだど。ほうし
てるうづん飯出来^げだべ。ほうすつど鍋下ろして、にぎり飯えつぺあこしえあだけ
ど。

ほの人あ、にぎり飯あんげあええつぺあこしえで、ないするおんだべと思て、

見っただば、今度あ、頭の髪の毛ほどえで、真中からざえつと分だけど。ほうしたば、頭の真中さ大つき口あ出はたけど。ほの人あ、どでして、どでして、も少すで梁が落つどこであえつたど。

ほのあねこあ、鬼婆んばだけどやー。今まで鬼婆んば、あねこに化げつたなであえつたど。

ほの人あ、おかねあくて、おかねあくて、梁の上でふるえつたど。んでも見つだば、今度あにぎり飯一つずつ、すとん、すとんど頭の口さ入つてやて、五升炊ぎ飯たちまぢのうづん食てしまたけどはやー。

ほうして、飯食うど、囲炉裏端さごろつと寝でしまたけどは。ほんで、ほの人あ今のうづだていうど、音しねあよん、こそつと下りできて、裏き置つた、風呂ど荷縄持てきて、家さ入て行て、ほの風呂さ鬼婆んばどご逆さんぶちこで、どんど山さ背負て行たど。

ほうして、ずっと山奥さ背負て行たば、鬼婆んば風呂がら手出してよごして、木の枝さたぐづえだけど。ほうすつど、ほの人あおかねあぐなて、背負てだ風呂

どえんと、ほごさおろして、自分家の方さどんどんど逃げて来たど。

ほうしたば、鬼婆んば、そんま風呂がら上がて、

「こらっ、野郎待でー。野郎待でー」

て追かけで来たけど。ほんで、ほの人あおかねあくて、おかねあくて、命がげんなて走して逃げだど。んだて鬼婆んば、

「こらー、野郎待でー。野郎待でー」

て追かけでくるおんだはげあえ、だんだん疲こわぐなて、走らんねあぐなたけどは。ほんで、なんずもしよねあんだし、かぐれつどごあねあんだがど思もて、あだり見だば、沼んどさ、しょうぶどよもぎあえつぺあおえつだどごあつけど。ほんで、ほの人あ、あそごだつど思て、ほごさ隠つただけど。

ほうしたば、鬼婆んば、あつ野郎ああそごさ隠つたなて言うど、がさがさど、ほごさ入ゝて来たけど。ほの人あ、あらつ鬼婆んばに見つけらつたは、なんずしらえがべて、ふるえなが見つだば、鬼婆んばどさ、しょうぶどよもぎの露あ付えで、鬼婆んば見る見るうづん腐くさて、そんまなぐなてしまたけどは。

んだはげあえ、五月節句にや魔除げだて軒さしようぶどよもぎ差すよんなな
だど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 舟生カネヨ)

5 し ぴ た れ 男

むがしあつたけど。ずうつとむがしな。塩根川の奥さ、うんとしぴたれた男あ
いだけど。あんまりしぴたれたおんだはげあえ、誰も嫁ん来んないねあけど。

ほの男人あ、あねこ欲しくなただ。ほうして、ほれも飯食ねああねこ欲しど
思たあだど。

ほの男あ、或る時にぎり飯背負て、飯食ねああねこあいねあべがて、さがしん
出だけど。んだて、ほんたあねこなの何処さがしたてのおんでねあべ。ほんで
仕方ねあくて、中田の方がら峠越えて、自分家さ帰んべど思て、峠の下まで来た

ど。

ほしたば、きれたあねこあ、切株ほっこさ腰かげでいだけど。ほうして、ほの男あ行
たば、

「あんつあ、あんつあ、何処まで行ぐや」

て聞ぐけど。ほんで、

「塩根川けあえさ帰んなだ」

て言たどゆ。ほしたば、ほのあねこあ、

「ないしん行てきたなや」

て聞ぐずおん。ほんで、

「飯食ねああねこさがしん行てきた」て言たばゆ、

「みつけだがや」

て聞ぐけど。ほんで、

「飯食ねああねこなの、何処にもいねあけ」

て言たど。ほしたらほのあねこあ、

「んだら俺あさつぱり飯かねはげあえ、俺あお前の嫁なてくえつが」

つけど。ほんで、ほのしぴたれ男あ喜で、

「ほう。お前飯食ねなが。んであどうが俺の嫁なてくねあが」

て、ほのきれだあねこどご、自分家さ連で行たど。

ほのあねこあ、さつぱり飯食ねで、うんと働ぐあねこだけど。ほんでしぴたれ

男あ、ええ嫁もらたて、うんと喜でいだけど。んでも、おがしごどにや、米あ、

あにあ食うより早くなぐなんだけど。ほんで、あにあ、或る時、あねこあどさ、
にぎり飯にぎらへで、

「今日あ、俺あ金山さ用たしん行てくつさげあえ、少すおそぐなつがしんねあ」

て、出がげだふりして、裏がら廻わて、梁の上さあがて、そつとあねこあなん
ずするおんだがみつだど。

ほしたば、あねこあ、あにあ出はつと直ぐ、五升もある位の米磨ぎ始めだけ
どや。あにあ梁の上で、

「あれああれあ。あんげあえ米磨えで何するおんだべ」

と思て見っだど。ほしたば、ほの米、鍋さ入^へつで、炊ぐなただ。あにあ、

「あらあらつ、あんげあえ飯たえで、なんずするおんだべ」

てみっだら、ほのうづん飯出来^でで、あねこあほの飯にぎり始めただ。ど。

ほうして、にぎり飯出来だら、こんだ、自分^お頭の髪^わの毛、真中がら分^{わけ}ただ。ど。

ほうしたば頭さ、大つき口あんなただ。ど。ほれあ鬼婆んばだただ。ど。んだおんださげあえ、あにあおかねあぐなて、ふるえできたども、先づ、だまつて見っだど。ほうしたば、鬼婆んば、ほの大つき口さ、にぎり飯^{しど}一つづ、すとなんとんど落してあ食い、落してあ食いすんなただ。ど。ほうして、ほのにぎり飯みな食てしまうど、囲炉裏^{ゆり}端^ばさごろつと寝でしまただ。ど。

ほんで、あにあこのこめんだどもて、梁がらそつと下りで、日あ暮^くつでがら、

「今、来た^え」て、家さ行^またけど。ほうして、鬼婆んばのあねこあどさ、

「あねこ、あねこ。お前^めなんぼしたて子供^お生^こさねはげあえ、家さ戻^もてころは」

て追^おだしかげだど。

ほうしたば、鬼婆んば、あにあ顔だまつて見で、こんだおかねあ顔して、あ

にあどごにらめで、

「このしぴたれ野郎あ、俺あ飯食うどごみつだな。んだら、今度あ、お前^んあどごも食てくえる」

ていうど、鬼婆んば本性あらわして、髪かふて、大つき口開えで、長んげあえ爪のある手ひろげで、あにあどさ、かがて来たけどやー。あにあおかねあくて、おかねあくて、逃^ねげだど。んでも、なんぼ逃げでも、

「この野郎待でー。この野郎待でー」

て、うすろがら追^ほかげでくるおんだはげあえ、ふるえながら走したど。んだて、なんぼ逃げでも、

「この野郎待でー。この野郎待でー」

て、何処までも追かげくんべ、あにあ疲^{こわ}ぐなてしまて、しょうぶど蓬やらさ隠^{あえ}だど。ほしたば鬼婆んば、

「あらつ、今ほご逃げで行ぐげあ、何処^どさ行きあがたおんだべ」

て、あつっこつさがしったけど。んでも、とうどう見つけかねあで、山の方

さ行てしまたけどは。

ほれがらじゅおのあ、五月節句にあ魔除げだて、軒さしようぶど蓬さすよなたあだど。とんぴん からんこあ ねあっけどは。

(話者 高橋良雄)

6 爺 っ つ あ ど 鼠

むがしあつたけど。ある所^どさな、貧乏だ爺^えっつあど婆^どっつあいであえつたど。冬^ふんなて雪あ降^ふてがら、爺^えっつあ家^えさ、鼠^えこあ一匹^{へあ}入^えてきたけど。

ほうして、室^{すま}の隅^{すみ}こで寒^さみそんしてふるえっただけど。ほんで爺^えっつあむぞせあえど思^もて、「あだれ、あだれ」て、囲^ゆ炉^る裏^りさあで、

「俺^あ家^えあ貧^ひ乏^ふだはげあえ、何^なにも食^かへるおのあねあ、これでも食^くて行^いぐんだ」て、豆^{まめ}こ十粒^{じゅうりつ}ばり食^かへだど。ほうしたば鼠^{ねずみ}こあ、ほの豆^{まめ}こんめあえそんして、

食つてあ爺つつか顔見、食つてあ婆つつか顔見で、食いあげつど、

「おかげさんで助かりあした」て言わねあばんだけど。

次の日、爺つつか庭で豆調製しつたば、豆こあ一粒、ころころつと転でえぐけずおん。ほんで爺つつか、

「あらあら、豆こあ転がてえぐであは、もつてあえねあごど」

て言いながら、ほの豆こ追かげで行たば、ほの豆こあ庭の隅この穴こさ、ころころつと入てえてしまたけどは。

ほんで、爺つつか、ほの豆こ追かげで穴こさ入てえたど。ほしたば、きれだあねこあ出はてきて、

「爺つつか、爺つつか。まずまず、えく来てくれあした」

て、自分家さ連で行たど。

ほの家ずあ、まずまず立派だ家で、爺つつかあの、まだ見たごどもねあよだええ家だけど。ほうして、奥の座敷さ連で行がつて、床の間、うしろんして坐らへだけど。ほうして、爺つつか坐つどあねこあ、爺つつか前さ来て、

「爺つつあ、爺つつあ。昨日、大変ありがどさんでした。俺あ昨日爺つつあに助けらった鼠こです。今日あほのお札んごつつおしであえどもて、きてもらたなです。まずまず、えぐ来てくれあした」

て、頭下げでお礼いうけど。ほうして、ごつつおえつぺあ出して、酒こなの出して注でくっただけど。

爺つつあ喜で、えつぺあごつつおなて、

「おおぎんごつつおなりあした。これ以上ごつつおなつど帰えらんねあぐなつさげあえ、これで帰えらへでもらうは」

て、爺つつあ立たど。ほしたば、あねこあ、

「爺つつあ、爺つつあ、帰えんながは、んだらしつとえあまじでくんねあが」
ていうおんだはげあえ、爺つつあなえだがど思て待ちつだど。

ほうしたば、あねこあ瓶こ一づ持て来たけど。ほうして、

「爺つつあ。どうがこの瓶こ、家さ持てえてころ」
ていうけど。ほんで爺つつあ、

「まずまずは、えっぺあごつつおなたほがん、お土産まで貰^あらてがは。氣の毒だな」

て、ほの瓶こもらて、家さ帰えて来たけど。ほうして、家さえたら、婆つつあ、
「なえだて爺つつあ、今^{えま}まで庭で豆こしえあし^あったけあ、ほのうづいねぐなたけあ、
何処さ行て来たおんだや」

ていうけど。ほんで爺つつあ、

「豆こしえあし^あったば、豆こあ一粒ころころど転^{ころ}でえぐけはげあえ、もつてあねあ
ど思^もて、ほれ追^ほかげで行^あたば、豆こあ庭の隅この穴こさ入^あてえたおんだおん。ん
だはげあえもつてあねあどもて、俺も追かげで穴こさ入^あて行^あたば、昨日の鼠こあ、
あねこんなて、昨日のお礼だて、えっぺあえごつつおしてくつで、この瓶こくつ
でよごしたけ」

てゆたば、婆つつあ、

「ほれあえが^あったな爺つつあ。んでもほの瓶こさ何^ああ入^あったおんだや」
て聞^あぐけど。ほんで爺つつあ、

「まだ開けでみねあだ。婆つつあお前開げでみろちや」

て、ほの瓶こ婆つつあどき、つだしたど。ほんで婆つつあ開げでみだど。ほうしたば、ほの瓶こん中さ、大判がら小判なの、金あえつぺあえ入ったなだけど。ほんで爺つつあど婆つつあしっしやわへ幸福ん暮したけど。どんぴんからんこあねあつけどは。

(話者 高橋良雄)

7 地ち蔵ぞむがし

むがしあつたけどー。むがしなー、或る所どさ爺さまど婆さまいだけど。

丁度、彼岸なおんだはげあえ、婆さまあ、

「爺さま、爺さま。今日あ彼岸いの入りだおんだおん、仏さまさ団子でもこしえあで上げねあんねべな」

て言たど。ほんで爺さまも、

「んだな、彼岸の入りだば、何処の家だて、団子上げるんだ、俺あ家だて上げねあんねあべな」

て、二人して団子こしえあだど。

ほうして、ほの団子仏さまさ上げんべと思て、婆さま大つき皿さ盛て持たど。

ほうしたば、なんずんしたんだが、団子一つ皿がら、ぽたつと落ちだけど。ほして、ほの団子あころころど転がえたけど。

ほんで爺さま、

「あら、団子あ落ちだちやは」

て、ほの団子拾うかんじよしたど。ほしたば、ほの団子あ、ころころど何処までも転でえぐけど。爺さま、

「団子、団子、どごまで行ぐや」て言たば、団子あ、

「庭の隅この穴までよ」て言いながら、ころころど転でえぐけど。ほんで爺さま、まだ追かげで行たど。ほしたば庭の隅この方さ転でえて、ほこの穴こさころころつ

と入てえたけど。爺さまもつてあねあど思て、ほの穴この中まで追かげで行たば、地蔵さまの前めあえさ行たけど。ほうして、ほごさ止またけど。ほんで爺さま、「もつてあねあ、もつてあねあ」て、ほの団子拾ろて、土のつだどご丁寧ていねんとてほれば自分食て、土のつがねあどご、

「地蔵じぞさん、地蔵さん。本当の少すで申もうす訳ねあども、上がてけらっしえ」

て、地蔵さまさ食へだど。ほうしたば、地蔵さま、

「爺さま、爺さま、ええごどあつさげあえ、一寸しつとえ待で」

て、爺さまどご呼ばたけど。ほんで爺さま、

「なえですや地蔵さん」

て聞だば、地蔵さま、まだ、

「今な、ここさ鬼えまこあだ来て、ばぐちぶちすつさげあえ、俺あどさ上がて待ちでる。ほうして、鬼こあだ、ばぐち始めつど、俺あ今だて教おへつさげあえ、ほしたら、鶏の真似して、こけあこつこて言ゆえ。ほうすつど鬼こあだ、ほら夜明げるは、て皆逃ねげで行ぐはげあえ、ほしたら、鬼こあだ置えでえた錢ぜに持て家さ行げ」

て教へだけど。ほして地藏さん、

「爺さま。まづ、俺あ肩さ上がれ」つけど。爺さま、どでして、

「肩さ上がれなて、とんでもねあ、もってねあくて、とでも上がらんねあ」
てゆたども地藏さま、

「ええはげあえ、まづ上がれ」

て、なんべんもおんだはげあえ、爺さま、

「地藏さん、地藏さん。もってねな。どうが許してころは」

て、肩さ上がたど。ほうしたば地藏さま、

「爺さま、爺さま。こんだ頭さ上がれ」つけど。爺さま、どでしてしまて、

「肩させあえも、もってあねあくてようよう上がたな、なんずして頭さなの、と
でも上がらえるおんでねあんだはげあえ」

て言たど。ほしたば、

おんな

「肩さ上がるも、頭さ上がるも同じだ。頭さ上がらねあどだめだはげあえ、上が
れ」

ていうけど。ほんでも爺さま、

「もつてあえねあくて、もつてあえねあくて、頭さなのほつても上がらんね」

て言^ゆたば、地藏さま、

「俺あ頭さ上がらねあど、鬼こあだに見つけらつで、食つてしまふはげあえ、ま
ず早く頭さ上がれ」

てきがねあけど。ほんで爺さま仕方ねあ、

「余^{あんま}りもつてあえねあども、ほんげあえゆてくえなだば、許してもらて、上がら
へでもらいあす。まずまず、どうがご免して下せあえ」

て、爺さま、ようやく地藏さまの頭の上さあがたど。

ほうして、爺さま、地藏さまの頭さ上がつか上がらねうづん、どやどやど鬼こあ
だ十匹ばかり来たけど。ほうして、地藏さまの前^{めあえ}でばぐち始めだけど。銭えつぺ
もつてきて、ほれやりとりしつたけど。ほうして、暫ぐすつど地藏さま、爺さま
どさ小^ちつちやあえ声で、

「爺さま、今^{えま}だ」ていうけど。ほんで爺さま、地藏さまの頭^{ゆえ}の上で、

「こけあこっこー」

て、鶏の真似して叫^さがだど。ほうしたば鬼こあだどでして、

「ほら、夜明げるはっ」

ていうど、銭なのみな、ほごさ置ぎっぱなしんして、走して何処^どさが行^えてしま
たけどは。

ほんで爺さま、地藏さまさゆつくんお礼^ゆ言て、ほの銭えっぺあもらて来たど。

ほしたば、婆さま、

「なえだやは爺さま、今まで何処^どさ行てきたおんだや」

て聞くけど。ほんで爺さま、

「転でえぐ団子追かげで、庭の隅^{すま}こがら入て行たば、地藏さん^{へあ}の前で止またけは
げあえ、拾ろて、きれだどご地藏さんさ食^かへだべ、ほしたら地藏さん、鬼こあだ
ばぐちん来^くつさげあえ、俺あどさ上がてで、鬼こあだばぐち始めだら、鶏の真似
して、こけあこっこて言^ゆえ、ていうはげあえ、地藏さんに言^ゆわつた通りんした
ば鬼こあだばぐち始めだはげあえ、こけあこっこてゆたば、鬼こあだ、これあこ

んげあえ錢置えて逃げだなよ。ほんでこれ地藏さんからもらて来たあだ。まず見ろちゃ」

て、ほの錢、婆さま見へだべ。婆さまどでして、

「あらあらつ。こんげあええつぺあ、えがつたな爺さま」

て、二人したりあ大喜びして、ほの錢かんじよしてみつだど。

ほしたば、ほごさ隣りのへちやへちや婆んば来たけど。ほうしてほの錢勘定したな見で、たまげでしまて、

「あらあらつ。なえだてお前家めあええであ、何時の間こまあえにほんげあえ金持んなたおんだや」

つけど。ほんで錢見らつだおんだし、仕方ねあ、

「俺あ家の爺さま、庭の穴へあこさ入てえた団子追かげで、こうして、地藏さんからもらてきたあだ」

て、すっかり語て聞かへだど。ほしたば隣りのへちやへちや婆んば、
「ほれあええご聞だ、んであ俺あ家の爺あどえも行がへねあんねあ」

ていうど、わらわらど自分家さ走して行て、

「爺々。まず隣りであ、たまげだもんだ。こげあえんして、地藏さんがらしこであえま錢貰らて来たけ。まずまずお前も早く行てみろちやや」

て、欲張り爺あどさ団子持がへだど。ほうすつど隣りの爺あ欲張りなおんだおん、「んだがつ」ていうど、隣りの爺さま家の庭の隅この穴さ、わんざど団子転がしてやて、ほこから自分も入てえてみだど。

ほしたば、団子あやつぱり地藏さまの前で止またけど。ほんでおそこそ土のつっだどごとて、地藏さまさ食へで、上がれても言わんねあうづん、地藏さまの頭まで上がて、鬼こあだ来んな待ちつだど。

ほうしたば、やつぱり鬼こあだ来たけど。んでも鬼こあだ、来つどすぐ、

「なんだ。何処がて人臭せあえ匂いあするんねあが」

て、一匹あ言たば、他の鬼こあだも、

「んだな。何処だ何処だ。丁度腹も減たしさがへ。さがへ」

て、探し始めだけど。ほんで爺あおかなぐなて、地藏さまの頭の上で、がだが

だとふるえっただ。

ほしたば、鬼こあだ、

「どうも地藏さんの近くだようだな」

ていうずおん。ほうすつど、爺あおかなくて、おかなくて、あんまりふるえで、地藏さまがらがつたり落ちでしまたけどは。ほうすつど鬼こあだ、

「ほら、いだっ」ていうど、腹減ていだ鬼こあだだべ、爺あたーだ鬼こあだに、むしやむしやど食つでしまたけどは。

隣りのへちやへちや婆んば、爺あなんぼがえつぺあ錢持てくんべど思て、穴こんどごで待ちつだて、爺あ来ねあんだおは、婆んば、

「俺あ家の爺あ、来ねあは、俺の家の爺あ、来ねあは」

て泣きながら自分家さ行たけどは。んだはげあえ、人真似しとなのするおんでねあおんだど。とんびん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋久雄)

8 地藏さまむがし

むがしあつたけど。ある所^どさな一、爺さまど婆さまいだけど。

ほうして、彼岸の頃だべちやな、婆さま、仏さまさ上げねあんねあて、団子こしえあだど。ほうして、ほの団子仏さまさ上げだど。ほうしたば、ほの団子あ、なんずんしたんだが、一つ^{しと}ころと転でえたけど。

爺さま、庭掃ぎしてで、ほれ見つけで、

「あらつ、団子あ転できたちゃは」

ど思^もて、ほの団子拾ろうかんじよしたども、団子あまだころと転でえて、庭の隅^{すま}この方さえぐけど。ほんで爺さまもつてあねあどもて、ほの団子追^ほかげで^えて、

「団子、団子、どこまで行くや」

て、団子あどさ聞だば、

「ふるだんの下までだ」

つけど。ほうして庭の隅この穴さ、ころころつ入^へてえたけど。ほんで爺さまも、

団子追かげで、庭の隅この穴さ入へて行たど。ほうしたば、団子あころころど転で
えて、地蔵さまの前で止めまたけど。ほんで爺さま、ほの団子拾ろて、土のつたど
ご自分食おわて、土のつかねあどご地蔵さまさ食へたど。ほしたば地蔵さま喜で、
「爺さま、爺さま。んめがつたな。今日あ面白おもおの見めへつさげあえ、俺あいうご
ど聞げ」

つけど。ほんで爺さま、

「はえはえ」て言ゆたば、

「まず、俺あ膝ひじさ上やがれ」つけど。爺さま、どでして、

「地蔵さまの膝さなの、もつてあねあくて、とでも上うがらんねあ」

て言ゆたば、地蔵さま、

「だまて俺あいうごどきげ」つけど。ほんで爺さま、

「んであ、どうがご免して下せあえよ」

て、おそろおそろ上こがたど。ほしたば今度こんだあ、地蔵さま、

「んであ、今度あ肩かたさ上うがれ」つけど。爺さまびっくりして、

「膝させあえももつてあねあくて、漸ぐ上がたな、なんずして肩さなの上がらえ
るおんであんだはげあえ」てゆたば、地蔵さま、

「膝さ上がるも、肩さ上がるも同じだ。おんな俺あいうごと聞で、まず早く上がれ」

つけど。爺さまほうゆわつたおんだはげあえ、仕方ねあ、

「あんまりもつてあもござへんども、んであまず許して下せあえは」

て、おそるおそる地蔵の肩さ上がたど。ほうしたば、地蔵さま、今度こんだあ、

「ようし。上がたが。ええが、今度あ俺の頭さ上がれ」

つけど。爺さまどでして、どでして、

「ないのごつたて、地蔵さまの頭さなの、もつてあえねあくて、もつてあえねあ
くて、とでもとでも、上がられあへん」

て言たども、地蔵さま、きがねで、

「上がれてゆたら上がれ。ええが、俺あいうごときぐ、ゆたばんだべな。早く上
がれ」

てきがねあおんださげあえ、爺さまも仕方ねあ、

まなく

「あんまりもってあえねあくて、眼つぶれるよだども、とうがご免して下せあえ」
て、地蔵さまの頭さがたど。ほしたば地蔵さま、

「ええが。えぐ聞でろよ。今そんま此処さ鬼こあだ来る。ほの鬼こあだ、俺あ前
で、ばぐち打ち始める。ほうして、金えつぺあ持てきてばぐち打ちすつさげあえ、
俺あ今ただ、て言たら、鶏の真似して、こけあこつこて二度言え、ほうすつど、
鬼こあだ、ほら夜明けだはて、金みな置えで逃げでえぐはげあえ、ほの金持てえ
げ」

て教へただけど。爺さま、

「こけあこつこて、二度言えばえなですか。わがりあした」てだけど。

ほうしているうづん、鬼こあだ十人ばりがやがやと集ばて来て、地蔵さまの前
さ、丸ぐ坐わたけど。ほうして、鬼こあだ、

「さあ、昨夜の続きだぞ」

ていうど、皆自分前さ金並べで、ばぐち始めだけどやー。

ほうして、すばらぐすつど、なになおんだが、鬼こあだ口げんか始めて、騒ぎ

出したけど。ほしたば、地蔵さま、爺さまどさ、

「爺。今だ」ていうけど。ほんで爺さま、鶏の真似して、

「こけあこっこー、こけあこっこー」て叫^さがだど。ほしたば鬼こあだどでして、

「ほら、夜明げるはっ」

ていうど、出した金なの見むぎもしねあえで、わらわらど逃^ねげで行^えてしまたけどは。ほんで爺さま、地蔵さまの頭がら下りで、ほの金みなさ^しらて、懷^{ひら}さ入^いっだども、あんまりえっぺあなおんださげあえ、しどごろさばりであ^へ入^いらねあくて、股引脱^{しき}えで、ほれさもつめで、地蔵さまどさ、なんげあえりもお札^ゆ言^いて、家^えさ行^いたけど。

家^えさ行^いたば、爺さま股引脱^{しき}えで、禪^い一^つてんであが脛^{つね}なて来^きたべ。婆^ばさまはほれみで、

「なえだや爺さま、ほんた格好^{かっこ}してきたどごあ。庭掃^{てい}ぎしつたど思^{おも}たら、一寸^{しちち}の^{めあ}間^まんいなくな^{こめあ}たけあえ、何^ど処^{じょ}さ行^いてきたおんだや」

て聞^きくけど。爺^やさま、

「まず、これ見ろ」

ていうど、股引の金、ざぐざぐとあげで、ほれがら、しとごろの金も皆出して婆さま^め見へだど。婆さまどでして、どでして、

「あらあらっ。なえなおんだや爺さま。こんげあええっぺあ、まずまず、どから持てきたおんだや」

て、たまげでたまげで、眼丸こぐしったけどは。

ほんで、爺さま語て聞がへだど。

「お仏さんさ上げつだ団子あ、ころころど転できたけはげあえ、もつてあねど^も思て、拾ろうかんじよしたば、庭の隅この穴さ、ころころつと転^へ入てえぐけはげあえ、穴ん中まで追^ほかげてえたば、地藏さまの前で止またけはげあえ、ほの団子拾ろて、土のつだど自分^{おわ}食て、土のつがねあどど地藏さま^か食へだなよ。ほしたば、地藏さま喜でくつで、面白^{おも}おのめへつさげあえ、俺あどさ上^へがれて言うけども、もつてあねあくて地藏さまどさなの上がらんねあて言^ゆたども、地藏さまきがねあで、上^へがれ上^へがれていうおんだおん。仕方ねあ許してもらて地藏さまの頭まで上^へがた

べ。ほしたば、地蔵さま、今此処さ鬼こあだ来て、ばぐちぶちすつさげあえ、えあんべあん時、鶏つぎの真似して、こけあこつこていうど、鬼こあだ、えつぺあ金置えで逃げで行ぐはげあえ、ほれさらてえげていうべ。んだはげあえ、ほの通りんしたば、こんげあええつぺ金置えで行てしまたはげあえ、ほれ拾ろてきたあだ」て教へだば、婆さまも喜で、

「えがったな、爺さま」ていうけど。

ほうして、二人あほしたりの金勘定かんじよしつたど。ほしたば、ほごさ隣のへちやへちや婆んば来たけど。ほうして、爺さまど婆さま金勘定しつたな見で、たまげでたまげで、

「ららったまげだ。何時の間こめあん、こんげあえ金持んなたおんだや」て聞ぐけど。人あええおんだはげあえ、爺さま教おへだど。

ほしたば、隣のへちやへちや婆んば、ほれ聞ぐど、すぐ自分家おわえさ走してえて、自分家の爺あどさ教へだど。ほして、

「爺。お前んも団子転ばしてやて、金さらてこえちや」て、団子こしえだけど。

ほうして、次の日、爺あ隣りの爺さま家の庭の隅こさ来て、ほごの穴さ団子転ばしてやて、

「団子、団子。どごまで行ぐや^え」

て聞いだど。ほしたば団子あ、

「ふるだんの下までよ」つけど。ほうして、ころころと転でえくけど。爺あ喜では、あどつで、ほの穴がら入てえたど。ほうしたば、^{へあ}やっぱり地蔵さまの前で止またけど。ほうすつど爺あ、土のつつだどごむりむりど地蔵さまさ食へで、土のつがねあどご自分食て、地蔵さま上がれても言わねあな、さつさど地蔵さまの頭まで上がて、鬼こあだ来んな待ちつだど。

ほうしたば、やっぱり鬼こあ来て、地蔵さまの前で、ばぐち始めだけど。えっくれあえしてがら、爺あ、

「こけあこつこ、こけあこつこー」て叫^さがだど。ほうしたば鬼こあだ、どでして「ほら、夜明げるはっ^{かぎのはな}」ていうど、わらわらど逃げでえたけど。んでも一人あ、あんまりあわくて、自在^{おわ}鉤^ひさ自分鼻引^ひかげでしまて、痛であ痛であて、ながなが

取れねあでいだけど。爺あほれ見つどあんまりおがしくて、「あはは」て笑^{わら}たど。
ほうすつど鬼こあ、爺どご見^しつけで、

「このくつされ爺^{しと}つこあ、人騙^{きん}しあがて、昨日騙^なして金さらて行たなも、この爺^つ
こだな」

ていうど、爺あどご地藏さまがら引きづり下ろして、皆どご呼ばて、爺あどご
むしやむしやと食てしまたけどは。

んだはげあえ、人真似^しなのしたたて駄目だおんだど。とんぴん からんこあ、
ねあつけどは。

(話者 舟生カネヨ)

9 ろぐであえの地藏さん

むがしあつたけど。あるどさな。うんと貧乏だ爺いさんと婆さんいだけど。

えんめん

今に正月も来^くんども、餅つぎであえども餅米もねあえ、魚買いであえども金もねあえおんだはげあえ、爺いさんが、

「婆あさん、婆あさん。編笠でも作^つくて売^うてきて正月すつがや」

て、婆あさんど相談して、編笠五^ごん枚^め作^あくて、ほれ背負^めて町さ出^でがげただけど。

ほの日あ雪降りて、ほれもまずまず降るおんで、ひでー天気だけど。んだおんだんだはげあえ爺いさんまだ難儀して、ようやぐろぐであえの坂^えまで行^いたど。ほの坂さ地藏さん六つ立てだあだど。

ほうして、この雪降り^りに地藏さま笠もかぶらねあで、頭^{かぶ}がら雪かぶて、だらくされん濡^ぬつでだあだけど。ほれ見^みで爺いさんが、

「あらあら。地藏さま、笠もかぶらねあで、だらくされだは。まずまずむぞせあえごど。持^もてきた笠売^うるどごんねあ、地藏さまさかぶへねあんねあ」

ていうなで、持^もてきた笠みな地藏さまさかぶへだど。んだて五^ごつはんて持^もてこねあ笠^{かぶ}だおん。あど一^いつ足^{あし}んねあんだおん。ほんで仕方^{ほう}ねあ、自分^{自分}頼^{たの}被^はりしつた手拭^{てぬげ}とて、ほれ被^はへで家^{いへ}さ来た^きたけど。

ほしたば、婆あさんが、

「なえだて爺いさん、めつぼう早えごと。町まで行て来たあだがや」

て聞ぐけど。ほんで爺いさんが、

「ろぐであえの坂まで行たば、地藏さま笠もかぶらねあで、雨雪でだらだらどみな濡つでだおんだおん。むぞせあえはげあえ、持て行た笠、みな地藏さまさかぶへできたは」

て言たば、婆あさんゆも喜で、

「ほう。んであえがった、えがった。んであ町まで行がねあで、地藏さまさ被へできてくつだなが、んであえがった、えがった」

て、婆あさんも喜でいだけど。

ほうして、二人したりあ、んであ別の工面しねあんねあ、ていうごどんなて、ほれあまず明日工面すんべて、二人あ寝だけどは。

ほうして、夜中んなたら、表の方でがやがやて、賑やあがだ音してきたけど。ほんで、爺いさんが、

「婆あさん、婆あさん、にぎやあがだ音あすんども、なにの音だおんだべ」
て、二人あ聞き耳立で聞つたど。ほしたば、

「ろぐであえの地蔵さ笠買て被へでくつた爺あ家あどごだべな」
ていうなだけど。

ほんで、爺いさんが、

「まずまず、だまってえぐきいででみる」

て、まだ、二人あさずんで聞つたば、爺いさんの家の前さ来て、
「ろぐであえの地蔵さ笠買て被へでくつた爺あ家あどごだべな」

ていうおんださげあえ、

「んであ婆あさん、俺あ家だべや」て言たど。ほんで婆あさんも、

「んだな爺さん。んであ、俺あ家だ俺あ家だて、叫がでみろちや」

て、婆あさんがいうおんださげあえ、爺いさんが戸開げで、

「ここです。ここです」て叫がだど。ほうしたば、頬被りしつた地蔵さま先達で、
(へんだち)

「あー、ここだ、ここだ」て、車さえつぺあ金積で来たあだけど。ほうして、

「昨日^{きん}あ、濡れねあで夜過^すごすごでげで、おおぎん有難^などさんでしたは。ほのお札^しん、この車がらみ置えでえぐ」

て、車がらみ、すこであえま金くつで行^えたけど。

ほんで、爺いさんど婆あさんまだ、笠売たどごんねあ、大した長者^{ちやう}んなて、樂々^{らく}ど暮^くらしたけど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋キク)

10 六地蔵さま

むがしあつたけどよ。むがしある所^どさ、正直だ爺さまいであえつたどよ。ほの爺さま、毎日柴伐^{つぎ}つてきてあ、ほの柴背負^{さみ}てえてあ売^うつて暮^くしていであつたどよ。

ある時^{とき}、寒^{さみ}くなてがら、まだ山さ柴伐^{つぎ}りんえて、柴伐^{つぎ}つて、長嶺^{ながね}越^こえて、柴売^うりん行^えたどよ。ほうしたら、六人の地藏^{じざう}さま立てだけどよ。雪も降^ふつてだべ。ほ

んで爺さま、

「この雪降りに地藏さま、なんぼが寒^{さみ}べあ」

どて、町さ行て、ほの柴売て、ほの金で笠買たど。ほうしたどころが、笠五つはんてねあくて、五つはんて買うよねあがつたんだどよ。

ほうして、ほの笠持て、地藏さまんどごまで来て、ほうして、ほの笠五人の地藏さまさかぶへだども、一人分足んねあべ。ほんで爺さま困まで、ほれでこんだ、
「お前どさばり何も被ぶへねあで行^えがんねあ、仕方ねあ、俺あ首巻かぶへで行くはげあえ、わりぐ思わねあえで、我慢してけるは」

て、自分首巻ほどえで、ほれ被ぶへできてあつたどよ。

そうして、家さ行たど。ほうしたば、今正月あくるていう時なおんださげあえ、
婆さま石臼^{ひぎうす}ひで待てだけどよ。ほさ爺さま、

「婆さま、婆さま。今来た」

て行^えたどよ。ほうしたば婆さま、

「なんだおの買て来たや爺さま」

つけど。ほんで爺さま、

「こういう地藏さまいで、あんまりかわいそうだし、俺だ子供もいねあんだし、ほの地藏さまさ、柴売て、笠ごんめえ五枚買て、かぶへだども、一人分足んねあおんだはげあえ、自分首巻かぶへできた。んだはげあえ何も買て来ねあ」

て。したら婆さま、

「あー、んだがんだが。んであえがった。爺さまど俺あ食ねあばえなだおん。あー、えがったえがった」

て、ほうして、二人あ練ねたけあえ餅食て、正月して寝で休んだどごで、小正月なて、十五日んなたけどよ。ほれがら爺さま、

「年越し近く地藏さまさ、こういうごととしてあつた、あー、あの一人の地藏さまにうらみされる」

ど思おもて、わざわざ柴伐りん行て、ほの柴売て、笠二つ買てかぶへでこねあば、仲間なかば喧嘩ぐくれあされすつど大変だて、柴伐て、ほれ売て、笠買てかぶへできて、

「婆さま婆さま、まず笠買て地藏さまさかぶへできた。まずまずえがった。これ

でうらみこなすかぶへだ」

て帰^けえて行^あたどよ。ほしたば婆さまも、

「あー、えがったえがった」

て、二人あ、まず、安心して、あるおので飯^ま食^まて寝^まだど。

ほうしたば、まだ寝^まづがねあうづん、

「正直だ爺さま家あ此処だが。正直だ爺さま家あ此処だが」

ていう声あすつずおん。ほんで爺さま起^おぎでみだどよ。ほうしたば、ほれあ六人の地藏さまだけどよ。

ほうして、

「あー、あー。おらだ爺さまに親^{すん}切^{へつ}ん笠をいだいで、誠に有難^もであがった。そ

んで、お爺さんどさも、我々あ心すねあくてあなんねあど思^もて、来たあだ」

て、六人して、食^おう物^のがら何^おがら背負^おてきて、

「これあ我々の心だはげあえ、婆さまど二人して食^えべでころ」

て、そうして、そこさどつさり置^ええて帰^ええて行^えたけどよ。

「あー、あー。婆さま婆さま。まずまず、こうゆうふうして、あの地蔵さま達持てきてくつだ。もってあねあ、ただ口開で食^{あえ}んね」

て、ほうして、ほれ開^ひれあでみだんだどよ。そうして、みだどこで、それあみな米がら金がら宝物がら、ほれごそえつ^へあ入^あったあだけどよ。

そうして、婆さま、

「あーあー。爺さま爺さま。これあ地蔵さまがら、ただ頂いであでげねあ。今度あ、町さ行て、この金で、餅米二升も買て、こうして餅つえで、地蔵さま食^かへねあばでげねあ」

ていうなで、爺さま町さ行て、餅米買てきて、餅つえで地蔵さま食へだどよ。

そうして、二人あ、

「地蔵さまがら貰た金だおの、この金無駄にあ使わんねあ。大事^{であず}んすねあんねあ。我々あ子供もだねあ、地蔵さま、きつと死にしめあえん使えて、くつだななんだはげあえ、決して無駄にあ使わんねあ」

て、大神宮さまさ上げで、大事んしたけどよ。

そうして、今まであ貧乏で、皆にやすめらつていであつたども、今度あ金えつ
へあ持て、えぐなて、ほれこそ長者んなて、ほごで暮しつたけどよ。

そうしていだどさ、ほの爺さま家さ、好き連れ（それづぎ）（駈落ち者）だな来て、

「爺さま爺さま。お前家で子供もいねあよだし、俺達（おらだ）二人あ行ぐどごもねあし、
俺達あ、二人あどご大事んすつさげあえ、俺達どご置えでくえらんねべが」

て頼むけどよ。ほんで、見れば馬鹿でなさそうだし、まだ正直そうで、まじめ
そうだよだはげあえ、

「ほつが、ほつが。んだばえ。入れ入れ」

て、自分家さ入つて、二人どご夫婦んさへで暮しつただよ。

ほのうづん孫も出来で、爺さまと婆さまあ、手車さつて（大事にすること）、な
んにもしねあで、安楽に暮したけどよ。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

（話者 栗田チウ）

11 孝行息子

むがしあつたけど。むがしな。ここだば塩根川^{しよねが}みてあだどさ、炭焼ぎしてる爺^ずさまど息子あいであつたど。ほの息子あ、とでも孝行だやさし息子であつたど。

ほうして、炭山さ行くど、

「つあつあ（お父さん）、つあつあ。木なの伐たり、背負たりなの俺あどさまがへ
でおげ。かまばり見でどころ」

て、親父さまどさ、難儀だ事なのさつぱりさへねあで、自分ばり難儀だ仕事す
んなだけど。親父さま、昼休みん時なの息子あどさ、世の中のごどさまざま教へ
んなだけど。ほうして正月^{づき}近けあぐ

「正月ん時^{づき}あ、七草まで休むおんだ。ほして正月三日まだ、不浄日^{にち}て外さ出歩ぐ
おんでねあ。三日の日ん出歩ぐど、ろぐだごどあねあおんだ。こどん夜んまなの
歩ぐど、雪女^{おほめ}あ来る。ほの雪女ずあ、子供抱^{わらすこ}できて、一寸抱^{しつとえあ}でころて、子供ど
ご抱がへで、抱ぐど、ほの子供あ、だんだん重であぐなて、しめあえにあ動^{えご}がん

ねあぐなて、凍死^{しみ}でしまうはげあえ、決して三日の晩なの出歩ぐおんでねあおんだ」

て教へただけど。

ほうして、ほのうづん正月あ来たずおん。爺さまど婆さまど息子ど三人あ、赤あえ魚こ^{とじ}（塩引）で正月して、ええ正月だて言^ゆてだけど。

ほうしているうづん、三日んなたど。ほしたば、ほの晩、爺さま急に腹痛であ、て、うなり出したけど。ほれもほれ昔だおん。ろぐだ薬なのねあべ。んだはげあえ息子あ、爺さまの腹なでくつだど。んだて治らねあくて、苦しそで、みでらんねあくて、三日の晩は決して出歩ぐなて教へらつだども、これだば医者頼むほがねあはげあえ、まず、医者さ行てこねあんねあ。医者せあえも来てくえれば、つあつあどご治してもらえる。つあつあせあえも治れば、俺なのなんづんなてもええど思^もて、提灯下げで医者どさ出がげだど。

ほうして、大分行て、もう少す行ぐど医者家だていうどごまで来たらなー、向^{おほこであ}うがら子供抱えだ女人あ来たけど。息子あ、あっおぼめあ来たじゅはて、分たお

んだはげあえ、知らねあふりして、行くかんじよしたったど。ほしたら、

「あのう」つけど。息子おもわず立ち止またど。ほしたば、

「あんまり悪^{わり}ども、一寸^{しつとあえ}このわらすこ抱^{であ}でくんねあべが」

というけど。ほんで、息子あ困てしまて、

「俺家のつあつあ腹やみしてで、急で医者呼びん行くなだはげあえ駄目だ」

て、行くかんじよしたて、雪あえつぺあ積^{えつ}た一本道だべ。ほして前^{めあえ}さ雪女あ立

てるおんだおん。行く^えに行がんねあべ。ほうすつど雪女あ、

「ほんとの寸時^{ちよつり}でええなだ。小便^{しよべ}あつまで堪^{こたあ}でいらんねあはげあえ、小便^{えあだ}する

間^{えあだ}ばんでえなだ。この雪降りで、この雪の中だべ、んだはげあえ子供置^{わらすこ}がんねは

げあえ、なんとが助けてころ」

ていうおんだし、元来^{ねっから}やさし若^{わげあえおん}者だべ。あんまり頼^やまつで、嫌^ゆだて言いかねあ

で、

「んであ、ほんとん一寸だぞ」

て、ほのおぼこあづがてしまたけどは。ほうしたば雪女あ、近^{かんげ}ぐの木の陰さ行

たきりは、なんぼ待ちつだて来つずあねあけどは。ほんで、息子あ、

「困ったごどしたちやは、つあつあなんぼが苦しんだべあ」

ど思て、ほんて困てしまたけどは。

この雪の中だおん、このおぼこ置えで行ぐわけにもえがねあべし。どもでなー。

ほうしているうづん、今度あだんだんおぼこあ重であぐなてきては、仕舞にあ立
ていらんねあぐなて、雪の上さ坐てしまたけどは。

「あー、困たちや。つあつあ言た通りんなてしまた」

ど思て、困てしまたけど。

あんまり重であさげあえ、雪の上さほのおぼこ置ぐがど思たども、おぼこあに
こにこ笑て、めんごえ顔こしてんべし、むぞせあえくて、とでも雪の上さなの置
ぐ気んなのなねあがつたど。

ほうして、困てつどさ雪女あ出はて来たけど。ほうして、

「どうも有難どさん。おかげで助かりあした」

て、礼言て、おぼごとてくつただけど。ほして、

「本当だば、お前、凍死ぬな待ちでで、食てしまうなだども、お前親思いだし、このおぼごども、雪の上さおぐなむぞせあて、やさしくしてくつだ心氣に入つたはげあえ、おぼご取りん来たなだ。爺さまの腹痛であなも、俺あ治してきてくつだはげあえ、医者さなの行ぐまでんねあ。早ぐ家さ行げは。ほれがら、明日隣り村の作蔵あ家さ行てみる。あそこの家の娘あ、門口さ立て待ちでつさげあえ、ほの娘もらてこえ。ええ娘だぞ」

ていうど、すうつと雪女あ見ねあぐなてしまたけどは。

息子あ、ふしぎだごというおんだと思て、家さ行てみたど。ほしたば、親爺さま治てだけどは。息子あ、あんまりふしぎだおんだはげあえ、親達さ雪女あ話語て聞がへだど。ほしたば爺さま、

「ほれあふしぎだ話だ。雪女あ人助けるなて、まだ俺だ聞だごとあねあ。お前だて、そろそろ嫁もらわねあんねあ年だはげあえ、ものは試しというごどもある。作蔵さん家んどさ、先ず行てみんだ。あそこの娘あ門口さ出はてれば、言た通りなる。あそこの家あ俺だ家と違て、大百姓だし、娘だて評判のええ娘だはげあえ、

俺あ家さなの呉えくつが呉んくねあが分らねあども、まず行てみてこえ」

ていうおんだはげあえ、息子あ次の日、洗らてさっぱりした着物きものきて行てみたど。

ほうしたば、前めあえの晩、雪女あ言たとおり、作蔵家の娘あ、門口さ立ていだけど。ほうして、にこにこして、

「俺あ家のおどつつあ、さきだからお前めあえ来んな待ちつださげあえ、まず入てころ」つけど。息子あびつくりしてしまたど。んでも先へあず入たど。

ほうしたば、おどつつあ、床の間の上座さ座布団敷しで、自分下座おわさ坐わて、

「まずまず、えぐ来てくれあした。さあさあ、先ず、こつちや坐わてころ」て、息子あどご上座さすえで、

「この度あ、誠にふしぎなご縁で、まずまず驚おどろぎあした。実あ夕べ枕神あ立て、娘あどごお前さんさける。ほうすつど、娘あ幸福しつやわへなるていうわけよ。ほして、お前さんが今朝来てくえれば、間違まちがねあはげあえ、ていうおんだはげあえ、今朝から待ちつたなです。こういう訳わけだはげあえ、どうが俺あ家の娘もらてけらつし

えあ」

ていうけど。ほんで息子も、

「誠にどうも有難ござりあす。私^{わだし}の方も、実^{ずつ}あ夕^ゆべな、つあつあ腹痛でぐして、三日は不淨日だはげあえ、決して出歩ぐなてゆわつだども、あんまり苦しむおんだはげあえ、医者迎^えげあえん行^えたなでした。ほの途中、雪女あ出はて来て、急用で医者迎^えげあえん行^えぐあだはげあえ、駄目だていうなむりむりおぼこ抱^かがへらつて困^こてだら、漸^おぐ雪女あ来て、おぼこ大事^{だいじ}んしてくつだお札^{ふだ}だどて、つあつあ腹治^{ふし}してくつで、明日^{あした}ここの家^えさ行^いて、娘^{むすめ}もらてこえて言^いわつだども、俺^{おれ}あ家^{いへ}なのあの通^{とほ}りの家^{いへ}なんだし、実^{じつ}あなんとおんだべども思^{おも}て来て見^みだなです。どうが何分よろすぐお願^{ねが}ひあえしあす」

て語^{かた}て聞^{きこ}がへだど。

ほうしたば、作^{めあえ}蔵^{ぞう}もどでして、

「んでも、お前^{めあえ}さんが親^{おや}孝^{こう}行^{ぎやう}で、優^{やさ}しはげあえ、神^{かみ}さま、この縁^{ゆかり}結^{むす}んでくつだなだべ。こういう娘^{むすめ}だども、どうが末^{すえ}長^{なが}ぐよろすぐお願^{ねが}ひあえしあす」

ていうごどで、二人あ夫婦んなて、末長ぐ幸福ん、暮したけど。んだはげあえ親孝行づあ、しねんねおんだど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋良雄)

12 ごげかがむがし

むがしあつたけどー。ある所さなー、母に早く死なつた女の子供こあいであつたど。ほこの家さ継母来たけど。ほの継母なー、女の子供こ連で来たけど。ほの女の子供こあなー、前の母の子供こより年下であつたど。んだはげあえ、前の母の子供こあどご、姉て言つてだけど。

ほの継母、初めの一、二年ばりあ、前の母の子供こどさもえがつたども、三年もたたね頃から、自分子供こばりめんごがて、前の母あ子供こあどさまだ、あそご拭げ、ここ拭げて、拭掃除あさへんべしだども、自分子供こどさは何にもさへ

ねあがつたど。前の母の子供こどは、朝早くから起ごして、飯たがへんべし、夜んままだ夜んまで、自分据^ねまてで、水屋^{みじや}しめあえはさへんべし、起きつどから寝るまで、暇なし使うなし使うなであつたど。まま子いじめずんだな。

ほうして、姉娘あ十二、三にもなつど、家^えん中のごどさへだ他^{ほか}ん、春だばわらび採てこえ、竹の子採てこえていうべし、田だ畑だて休む暇ねあがつたど。ほうして、姉娘あ外さ出はたていうど、自分達^{おわだ}ばり小豆汁して食たり、牡丹餅^{ぼたもち}つで食たり、んめあえおのあ自分達ばりして食てんなだけど。

んだはげあえ、姉娘あ陽にやげで黒ぐはなんべし、手足さアカギリあ切れんべし、めんごげなのしてらんねがつたど。ほうして、着物^{きもの}だて、着替^{きかえ}なのねあおんだはげあえ、あつこつ切れつどあ継ぎ、切れつどあ継ぎなおんださげあえ、きれだ物なの着てつごどあねあがつたど。

村の人達^{したう}あほれ見で、継母じゆあ、あーいうおんだべちややな。まずまず姉娘あどいどしごどて、みでんども、なんずもさんねあじゆんだ。ほんとんむぞせあがつたど。

ほうしてな、ある時、姉娘あ継母に、わらび採てこえて言わっただけど。ほうしたば、妹も「姉、俺あどごも連で行こ」ていうけど。んでも邪魔なるばんだどもて、「楽んねあはげあえ、お前、家にいろは」て言たども、連で行こで聞がねあけど。ほうして、継母もほんげあえいうもの連でえげて言うけど。ほんで仕方ねあ山さ連で行たど。

ほの日あ沼の傍さ行てあつたど。ほの沼あ、あんまり太つき沼んねあども、深ふけあえくて深くて、底あ見ねあくれあで、青々てる沼であつたど。

二人あ、ほの沼の側で、一生懸命なて採てだど。ほうしていろうづん、じゃぼんていう音あして、あつあつて叫きがぶ声あすつけど。姉娘あ、はつと思てほごさ走してえてみだば、妹あぶくぶくと沈すずんでえぐごだけど。ほんで姉娘あ、自分もざんぶり、ほごさ飛込で、助けるかんじよししたど。んだて、十四や十五のわらすこだべ。二人あただ、ぶぐぶぐど沈でしまたけどは。

ほれがら暫ぐしてがら、白え着物きた神々し女人あ、両手さ何が抱で、沼がら上がて来たけど。えぐ見たら、抱がつてだな姉娘の方だけど。ほの女人あ沼の

主であつたど。

ほうして、ほの女の神さまあ、姉娘さ、ええ着物きへでくつで、体中撫でくつだけど。ほしたら、姉娘あ生れ代たよん、きれんなて、生き返^{げあえ}たけどや。

ほして神さま、

「お前は、本当なら憎えはずの妹を助けるため、自分の命も惜しまないで、よく沼さ飛び込^こだ。その心の美すさど、やさすさを感じだがら、お前を救つてやったが、妹の方は神さま達が、そのまま天さ連れで行くそうだ。しかしお前だけを家さ帰^{けあ}えせば、継母に悪心を起さへ、罪つぐらへるごどんなる。んだがら、お前はこの山を越した、ずうつと向うの村さ行げ。ほうして、最初の家さ泊めでもらえ。

ほこの家さ何時までもいで、ほこの家の若^{わげあえおの}者の面倒みろ。ほの若者は神々のめがねさかなた優し若者だ。今貧乏^{えま}だが、お前を嫁にしてくつで、ほこの家さ置えてくれる。だがら、二人で一生懸命働げば、必ずええ運が来て、暮しもえぐなる。

んだはげあえ、この山越えて、一番始めにある家さ行げ」

ていうけど。

姉娘あ、ほの女神さまの親切すんへづだ優し言葉では、母親ががそばにいるみであんた気あして、ががー。ていうど、ほの女神さまを抱ねあえぎづえで、泣でしまたけどは。女神さまも姉娘あどごぎつつぐ抱えで、

「よしよし。これがらえぐなっさげあえ、泣ぐな泣ぐな」
て、頭撫ででくっただけど。

ほうして、姉娘あ山越え野越えして、一番始めの家さ泊めでもらて、ほこの家の嫁こんなて幸福しめあえん暮したけど。

ほれがらなー、継母あ、自分娘あ二日たても三日たても来ねあべ。ほうすつど「おもよー、おもよー。」て、自分娘の名呼しめあえばて、泣なぎながらさがして歩くけど。ほうして、仕舞しめあえにあこじき（ほえど）んなて、どさが行えて見ねあぐなてしまたけどは。とんぴん からんこあ ねあっけどは。

（話者 高橋良雄）

13 ごげかがむがし

むがしあつたけど。

あるどさなー、かがに死なつて、娘一人ど二人暮しの人あいであつたどー。ほの人あ、自分女子わらすさかもてつど働げねあぐなるおんだはげあえな、継母もらたど。

ほうしてなー。二、三年もすつど、継母あ自分連できた女子わらすばりめんごく、先のかかのわらすこあどごあいじめでばりいんなだけど。

ある時、秋んなて栗拾ろう頃、継母二人あどさ、栗拾ろてこえて言たけど。ほうしてなー。先のかがあわらすこどさ、底さ穴の開ったはぎこやて、

「ゆき。お前あ、このはぎこ持て行げ。ほうして、先ん立て歩げ」

つけど。ほうして、自分連できたわらすこあどさばええはぎこやて、

「そで。お前、ゆきあ後んなて拾うて歩げ」

つけどやー。

ほうしてなー。二人あ山さ行^えたど。二人あ栗ぬぎのあつどさ行て、ゆきあ先ん
なて、そであ後んなて拾ろい始めだど。ほうして、ゆきあ拾ろてはぎごさ入^へつた
ば、ぽたつてはぎごがら落ちる音あするよんたずおん。ほんで、ゆぎあおがしど思^も
て、まだ拾ろて入だば、はぎごさ穴開^あで、ほんで落づんなだけど。これだば駄
目だていうなで、底さ柴なの草^くな^さの入で落ちねあよんして拾ろたど。んだおんだ
はげあえ、そであ、ゆきの後ばりつでありたおんださげあえ、さつぱり拾い
かねあで、ゆきばりえつぺあ拾ろて家さ行たど。

ほしたば、継母、

「ゆき、なんぼ拾ろてきたや」

て聞ぐけど。ほんでゆきあ、

「みろー。これあ、はぎごさえつぺあ拾ろてきた」

て、はぎごつだしたけど。みだば本^{ほん}当^{とん}にえつぺあ入^へつたべ。ほんではぎごがら
あげでみだど。ほしたば、底がら草など柴なの出はてきたけど。ほんで継母、は
ぎごの穴みつけらったなど思たども知らねふりして、自分わらすこあどさ、

「そで、お前^{んつ}あなんぼ拾ろたや」

て聞だど。ほしたば、そであ、

「二^{したつ}つ、三つはんて拾ろわねあ」

つけど。ほしたば継母あ、ゆきあどごにらみづけで、

「ゆき。自分^{おわ}ばり拾ろて、そであどさ、さっぱり拾ろわへねあづあねあべな」

て、ゆきあどごばり、しこであまごしやぐなだけどやー。

ほうしているうづん、秋あ過ぎ、冬も過ぎで、春んて、わらびあ出る節^{へつ}んな
たど。ほうしたば継母あ、二人あどさわらび採りん行てこえつけど。ほうして、

「ゆき。お前^{んつ}あそであ後立て歩りげ」

ていいづけでやたど。ほんでゆきあ、そでの後んて山さえたど。

ほうして、そであ先んて歩りたおんだはげあえ、朝つゆん濡つてしまて、わ
らびの出つたどごまで行がねあうづん、だらくされなて、寒みぐなて、いらんねあ
ぐなて、途中がら家^{けあ}さ帰えてしまたけどは。んだおんだんさげあえ、ゆきばりわ
らびえつぺあ採て帰えたど。

ほうして、ゆきあ家さ行たば、継母しこであまごしえでいだけど。ほうして、
「ゆきつ。なえの話だ。そであどごばり先ん立ででだらくされんさへでつ。風邪
でもひがへだらなんずするつもりだ」

て、箒でゆきあどご、ばえんばえんどたであだけどー。

ほうしているうづん、二人あ年ごろんなたど。ほしたばゆきあ、とても奇麗きれ
なたけど。んだおんだんさげあえ、長者家の息子えあ、ゆきあどさ惚れだけど。

ある時、継母あ、ゆきあどご田打ちんやたど。ほうして、男達おとこでもせねあく
れあゆいづげだあだど。ほんでゆきあ、一生懸命なてしたたてさんねあべ。ほの
うづ晩方なたど。ほんでもゆきあ田がら上がらねあで、田打ちだけど。

長者の家の息子あ、よあがりすつずき、ほれ見で、

「ゆき、まだあがりんねあなが」

て、声かげだど。ほしたばゆきあ、

「まだ出来ねあはげあえ、上がらんねあ」
というけど。ほんで長者家の息子あ、

「まだ出来ねあなて、これがらんぼするかんじよや」

て聞だば、ゆきあ、

「まだこれがら、畳三十枚ぐれあんどご打ぶてがらんねば上がらねあなよ」

つけど。息子あたまげで、

「ないだどや。ほんげあえしたら、夜中なんべあな。ほんげあえ誰あすろつけどご」

て聞だば、

「ががだ」つけど。ほんでむぞせあぐなて、

「暗ぐもなてきたし、止めで上がれは。あどあ、明日の朝ま暗れあうづん、俺あ雇人連わがしえつで来てしてくえつさげあえ、ががどさ出がしてきて言ゆておげ」

て、親切すんへつん言ゆてくっただけど。んだべちややな。自分みそめだ女子あ、継母にいづめらつでんな、見てらんねあんだおんや。ほうして、次の日あしたうす暗れあうづん、息子あ、ほの田さ雇人連つで行て、みな打てくっただけど。

ほれがらな。長者家の息子あ、仲人立なこうどで、ゆきあどご貰いん行たど。ほし

たば、継母あ、そであどごだばくえんども、ゆきあどごあ、今だばくえんねあて
いうおんだはげあえ、息子あ長者どさゆて、ゆきあ家のつあつあどさ、なんずし
ても、ゆきあどご貰いであなで、そであどごだばいらねあて、かげあてもらたど。
ほうしたば、長者がらゆわっだおんだはげあえ、ゆきああ家の父、断りかねあ
で、ゆきあどご呉っただけど。

ほうしてなー。ほれがらなー。ゆきあ長者家さ行て、皆にめんごがらつで、幸
福ん暮ったど。ほうして暮してるうづんなー。ゆきあ腹大つきぐなて、そんま生し
そんなたけど。ほんでなー、ゆきあ実家さ歸えて、丈夫で、ほれごそめんごえお
ぼこだけど。

ほんでゆきあ、自分夫あどさ、丈夫だ男おぼこ生っだはげあえ、喜でころて手
紙書あで、ほれ人さ頼だど。ほしたば継母あ、ほの手紙とて見だど。ほうして、
面白ぐねあおんだはげあえ、ほの手紙焼えでしまて、自分、別ん、ゆきあ名前で
手紙書あで、聲あどさ届けだどー。

ゆきの聲あほの手紙見だば、おぼこ生したども、片端だおぼこで、眼もつぶつ

でだおぼこだはげあえ、捨てでもえがべ。ほんたおぼこ生して面目ねあはげあえ、離縁してころはて書あつただあだけどやー。

聶あどでして、ゆきあどごなの、なんたごどあつたて離縁なのさんねど思て、ゆきあどさ手紙書あで、持がへでやたど。ほの手紙さ、なんたおぼこ生したて、ほのおぼごあ、自分達おぼこだはげあえ、大事んして早く帰あて来え。決して離縁なのさんねて書あだあだけど。

ほしたば、継母あ、又ほの手紙取て、焼えでしまて、自分別ん書あだあだどー。ほうして、ほんたおぼこ生た者、俺あ家さおがんねあ。離縁すつさげあえ来ねあたてえは。て書あで、ゆきあどさ見へだあだどやー。

ほの手紙みつど、ゆきあ、情ねあぐなて、悲しくて、床の中で、赤子抱えで、「めごめご。お前家のつあつあ家さ来んなどは。めごあどさ名前つけでもらて、つあつあに抱えでもらて、大事んしてもらうべと思たあだな、家さ行がんねば、私達二人あ死ぬばんだべは。むぞせあな、めご」

て、赤子撫でで泣で涙止まらねけどはー。

ほんで、ゆきあ、死ぬつもりでいだおんだはげあえ、ほの後あ、自分家のあに
どさ手紙も書がねあべー、二十日たても、一と月たても家さ帰えらねべしなおん
ださげあえ、あに 聳あ、これあおがしど思て、ゆきあどご迎げあえん行たど。

ほしたば、継母あいねあで、ゆきあ赤子どさ乳こ飲まへつだけど。あに 聳あ、

「ゆき迎げあん来たぞ」

てゆたば、ゆきあ泣ぎ始めだけど。ほんで、

「ゆき、なして泣ぐどご。嬉し泣ぎが」

てゆたば、ゆきあかんぶり振て、

「俺あどご離縁するなて、赤子なの男おぼこで、こんげあえ丈夫で、こんげあえ
めんごえな離縁するなて、情ねあくてだ」

て、おぼご見へだど。め ほんで聳あどでして、

「なにつ、離縁するて書あつだて、ほれあおがし。お前片端だおぼご生して面目
ね、こんなおぼご生す女おなこだはげあえ、離縁してころて書あでよごしたべ。んでも
俺あ、なんだおぼごだて俺達おぼごだはげあえ、大事んして、早ぐ帰えて来え。」

て書あだあだ。んであ、俺あ手紙見へろ」

て言たど。ほしたば、ゆきあびつくりして、

「なえの話だやは。はなす んであまづこの手紙見でころ」

て、ほの手紙しとごろさ入つで、

「ゆきつ。こんな所に一寸もいらんね。まず早く家さ行どくごは
しつとえあ

て、家さ連で行たど。

ほうしたば、長者家であ、ほの赤子おぼご見で、

「なえだてめんごえ、丈夫な赤子だごど。ほれさ男おぼごだおん。えがった」

て喜で、祝事ゆわあごとしてくつだけど。

ほれがら賀あ、自分どさ来た手紙ど、ゆきあどさ行た手紙持て、代官所さ、

「こういう偽手紙書あで、母親ど赤子自殺さへるよだ目あわへる者あいだは

げあえ、どうが詮議へんぎしてもらいであ」

て訴え出だど。ほうしたば、代官が、

「これあ二通とも同じ字で、女の字だな。よし」

て、とりあげてくつで、いろいろ調べだば、とうとう、ほの手紙書あだな、継母で、ゆきあ今まで、どれ程いづめらつたがわがらねあていうごまで分て、継母しめあらつては、百ただぎんさつだほがん、牢さぶづごまつでしまたけどは。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋久米次郎)

14 ごげかがむがし

むがしあつたけど。

あるどころになー。米福よねがくど糠福ていう二人の娘あいであつたど。米福あ先妻の子で、糠福あ後妻の子であつたど。

ある時、二人あ山さ栗拾いんえたど。その時、継母こげかがあ、先妻の米福あどさば、なんぼ拾たてたまらねあ、切つた袋持たががへで、我が子さば、ええ袋持がへだけど。

ほうして二人あ山さ行て、栗拾いたど。んだて、先妻の子あ、なんぼ拾たて溜らねべ。んだはげ家さ行げば、母さんにごしやがえんだし、なんとしたらえんだがどもて、沼のほどりさ行て、悲しぐなて、さめざめど泣^ねっだど。

ほうしたば、ほごの大つき沼がら、ぶぐぶぐど泡出できて、大つき蛇^{じやんであえ}体出はてきたけど。ほうして、ほの大蛇、

「米福米福、俺あ今、この沼の主んなてんども、お前の母さんだぞ」
というけど。ほんで米福あ、

「俺あ家の本当の母さんだごつたら、ほんた大蛇のようだ姿でなの出はらねあで、元通りの本当の母さんの姿^めなて見へでころや」

て言^ゆたど。ほしたば、ほの蛇体、ずぶずぶ沈^{しず}でえて、こんだ本当の元通りの母さんの姿^めなて出はて来たけど。ほうして、

「ある時、殿さまの歌の会あつさげあえ、ほん時こういうに歌えばしほれがら、お前どさ、宝物^{おの}の小袋さづげつさげあえ、これ人のいねどごで、とんとんとぶつけっずど、さまざまの自分どさ合うええ着物あ出はてくつさげあえ、ほれ着て、

殿さまどさ行て、お前歌てみろて言わつたら、

へ ばんさらや ばんさらや

さらちゅう山に雪降りて

それを根として 生える松かな

て、歌えよ」

て、教へだけど。ほうして、

「お前どあど何時会えるがわがらねあ」て別つで行たけどは。

ほうして、別れつ時、袋直してもらて、米福あ、ほの袋さえつぺあ栗拾ろて、家さ行たけど。

そうしているうづん、殿さま歌の会開ぐはげあえ集^{あつ}はれて、ふれまわてきたど。

ほんで糠福あ立派な着物着かざらへでもらて、出はて来たけど。んでも、継母あ、先妻の子なのなんた格好して行たてかもごどねあかんじよしていだら、ほれごそ立派だ着物がらなにがら整^{ととの}えで、着て出はて来たけど。ほうして無事殿さまのどさ行たど。

ほうして、殿さまの前で、歌よむごんめあえなて、いよいよ米福の番さきたけど。
ほんで米福あ、

へ ばんさらや ばんさらや さらちゅう山に雪降りて、それを根にして、
生える松かな

てうだたど。ほうしたば、殿さますっかり感心して、

「お前、これくれあ上手じょうだば、あどの娘もなんぼ上手だがわがらね。糠福、しと
づ歌てみろ」

て言ゆわつたど。むがしあ、学もなにもねあおんだし、糠福あ、自分歌ぐれあえ
え歌ねあおんだどもて、

へ けあえ餅三べあえでらつと食って、藪さつと投げだれば、

すぎ 鳴あばつたり 立つたりや

て歌たど。ほうしたば、そごさ並でだ人達しだうあ、皆あつつでもこつつでも、くつ
くつ、くつくつつ、ておがしがて笑てつけど。ほんで、糠福あ殿さまの前で、た
だ恥かいでしましたけどは。

米福あ、その後、殿さまさ仕えるごどんなて、仕舞しめあえにあ、殿さまの奥方へんたうんなて
末長ぐ幸福しつやわへん暮したけど。とんぴん からんこああ ねあつけどは。

(話者 中川チャウ)

15 桃 太 郎

むがしあつたけど。

むがしな。あるどさ爺ど婆んばいだけど。爺あ畑の胡瓜さ手くんねあんねあ、
ていうなで、山さ柴刈りん行たど。婆んばあ今日あええ天気だはげあえ、洗濯へんたくで
もすんべていうなで、川さ洗濯え行たど。

ほうしてな。婆んば川で洗濯しつたら、塩根川の方がら、どんぶりこ、どん
ぶりこどな、大つき桃あ流ってきたけど。婆んばあ、なえだて大つき桃だごど
て、びつくりしたけど。ほうして、ほの桃拾ろてみだば、大つきおんで、大つき

おんで、ほうして、とでもんめあえそだけど。んだはげあえ、これだばなんぼが
んめあえんだが、爺いと二人して食^かねあんねあていうなで、家さ持てえて爺あ来
んな待じっただど。

ほのうづ爺あ手柴でつちら背負て、家さ来たけど。ほんで婆んば、

「爺さま、爺さま。まず来てみでくつちや。下の川さ洗濯行たば、塩根川の方が
ら、こんげあえ大つき桃あ流つできたけじゆ。ほれまずみろ」

て、ほの桃^め見へだべ。ほしたば爺いもどでして、

「なんだて、随分^{ぜいぶん}大つき桃だごど。こんげあえ大つきなまだ見だごどねあな」
て、たまげっただけど。

ほうして、婆んば爺いど二人して、ほの桃食うべと思^もて、まな板^{まなあいだ}さ上げで、包丁^{ほえ}
で切べと思たら、ほの桃あしとりで真中がら、ざくつと割っただけど。ほうして、
中がら、

「おほげあえ。おほげあえ」

て、赤子^{あがこ}おほこあ出はてきたけど。爺いど婆んばありつたげどでしてしまたけ

どは。んでもあんまりめんごえはげあえ、二人して育てるごどんしたど。ほうして、桃がら生っだはげあえ、桃太郎どつけんべて、桃太郎どつけで、大事^{であじ}んして塩^{あづあえとじ}引^ひなの食^くへで育てだけど。

桃太郎あ赤^{あけ}え魚^{とじ}こでまま食^くて、ほのうづん大つきぐなたけど。ほうしたば、あ^つる時^{とき}桃太郎あ、爺^{おや}いど婆^ばさまどさ、

「爺^{おや}さま婆^ばさま、にぎり飯^{まめ}にきてくんねが」

というけど。ほんで爺^{おや}あ、

「なえだや桃太郎、にぎり飯^{たが}なの持^もてどさ行^いぐどご」

て聞^きだら、

「鬼が島さ鬼征伐^{おにせいばつ}行^いぐなだ」

つけど。ほんで爺^{おや}いど婆^ばんば、どでしてしまたけどは。んでも、桃太郎あ行^いぐていうなだば、行^いがへねあんねあべていうなで、きみ団子^{だんご}えっぺあこしえあでくつだど。

ほんで、桃太郎あ、ほれ腰^{こし}下げで、鉢^{はち}巻^{まき}して、刀^{やいば}差^さして出^でがげだど。ほうして

野越え山越え行たば、わんわんて犬こあ出はてきたけど。ほうして、

「桃太郎さん桃太郎さん。どこさ行きあすや」

て聞ぐけど。ほんで桃太郎あ、

「鬼が島さ鬼征伐行ぐなだ」

て言^ゆたば、犬こあ、

「腰さ下げっだおのあ何ですや」

ていうけど。ほんで桃太郎あ、

「日本一のきみ団子だ」

て教へだど。ほしたば犬こあ、

「んだら一つけろや。俺も鬼が島さ鬼征伐ん行くはげあえ」

ていうけど。ほんで桃太郎あ、

「んであ一つくえっさげあえ、俺あどさつで来え」

てゆたど。

ほんで桃太郎あ、犬こあどさ一つくつで連^つでえたど。ほうして、ずうつと行た

ば、今度あ、きやつきやつて猿こあ出はて来たけど。ほうして、

「桃太郎さん桃太郎さん、どこさ行ぐどこですや」

というけど。ほんで桃太郎あ、

「鬼が島さ鬼征伐行ぐなだ」

て言たべ。ほしたば猿こあ、

「腰さ下げつだおのあ、何ですや」

というはげあえ、

「日本一のきみ団子だ」

て言たば、猿こあ、

「んだら、一つしとけろや。俺も鬼征伐えぐはげあえ」

というけど。ほんで猿こあどさも一つけつで、犬こど猿こあどこ連で、まだずうつと行たど。

ほしたば、今度あ、けんけんけんて出はてきたおのあいだけど。ほれあ雉だけどや。ほして、雉も、

「桃太郎さん、桃太郎さん。どこさ行くあですや」

て聞くけど。桃太郎あ、

「鬼が島さ鬼征伐だ」て言^ゆたど。ほしたら雉あ、

「腰さ下げつたな、何ですや」ていうけど。ほんで桃太郎あ、

「日本一のきみ団子だ」て言^ゆたば、雉あ、

「俺あどさも一つくんねあが、鬼征伐、俺も行くはげあえ」

ていうけど。ほんで桃太郎あ、雉あどさも一つくつで、犬こど猿こど雉あどこ連^つ

で行^ゆたじゅおん。

ほうして、野っ越え、山越えずうつと行^ゆたば、鬼が島見^めつけど。お城あつて、

門がつ^つで、ほの門どさ青鬼なの、赤鬼なのいで、金棒持^もていただけや。ほうし

て、門びつ^つつりくえで、お城の中さ入^あらんねあなだけど。ほんで桃太郎あ雉あど

さ、

「お前飛^えで行^ゆて、門番の鬼こあだどこやつ^つつ^つけで、門開^あけろ」

て言^ゆたど。ほうすつど雉あ、ばだばだど飛^ゆで行^ゆて、門の上飛^ゆび越^ええで、門守^もつ

てだ青鬼こだの、赤鬼こだあの頭やら眼まなぐなの、くぢばでじよぎじよぎどつついだど、ほんで鬼こあだ、痛であがて、

「痛であ痛であ」

て、皆逃げだけどは。ほんで雉あ中がら門あげだど。

ほんで桃太郎あ、犬こど猿こあどご連つで鬼こあだえつぺあだお城の中さ入へあて行たずおん。ほうして、鬼こあだどご攻めだど。

犬こわんわんと吠えて、鬼こあだの足かったり、股かつたりすんべ。猿こあ鬼こあだの顔つらひつかぐんだが、頭の毛むするんだが、ひどえおんだけど。ほうして雉あ鬼こあだの頭つづぐんだが、眼つづぐんだがで、鬼こあだ、皆、

「痛であ痛であ」て泣きながら逃たげてありぐけど。

桃太郎あ刀拔えて、鬼の大將ど戦たたがたど。んだて桃太郎あ荒れあおんだべ、なんぼしたて桃太郎にかなわねあけどや。

ほんで鬼の大將あ、桃太郎あどさ、

「降参です、降参です」

て、手つえであやまたけど。ほうして、お城の宝物おのみな出してきて、桃太郎あどさ呉くっただけどは。

ほんで桃太郎あ、ほの宝物みな車さ積まへで、雉ど犬こに引がへで、猿こに後押しさへで、家さ帰て来たど。とんぴん からんこあ ねあっけどは。

(話者 高橋良雄)

16 桃 太 郎

むがしあつたけど。

あるどさな。爺いど婆んばいだけど。二人したりあ子供いねあおんだはげあえ、なんとが子供授げでころて、何時いつも神さまさ祈ったけど。んでも、授けてもらいかねあでいであつたど。

爺ど婆んば、田ど畑持ていだおんだはげあえ、毎日田や畑の仕事していであつ

たど。んでも、薪もねあば駄目だおんださげあえ、爺ずあ田や畑仕事の暇づぎだ時あ、何時でも山さ薪伐りん行ぐなであつたど。

ある時、爺あ暇出来たおんださげあえ、薪でも伐てくんべていうなで、山さ行たど。ほうして、薪なるよた木さがしたら、向うの方さ、なんだが桃の恰好したおのあ成つてたど。ほんで爺あ、何だべもど思て行てみだど。ほしたばやっぱり桃だけど。んでも、大つきおんで、大つきおんで、爺あたまげでしまたけどは。

爺いなのまだ見だごどのねあ大つき桃で、ほれさ色も赤ぐなて食い頃だし、これあ取てえて、婆んばど二人したりで食うべ。なんぼがんめあんだがて、ほの桃取つど思たら、重であおんで重であおんで、爺あようよう取たど。ほうして、持てえた荷縄にんなで、ほれ、よつこらさつと背負しよて、家さ行たけど。

ほうして、家さ持て行て、婆んばどさ見めへだら、婆んばもたまげでしまて、眼まなぐ大つきぐしたけど。ほうして、爺あ、

「婆んば婆んば。この桃切てみつちや。色もええし、なんぼがんめあんだが」

て言^ゆたば、婆^ばんばも、

「んだな爺^ぢい。これだばんめあんだな。んであ包^ほ丁^{えい}持^じてきて切^きてみ^みつが」

て、婆^ばんば水^み屋^{じや}がら包^ほ丁^{てい}持^もてきて、ほの桃^{もも}切^きすべ^もと思^もて、包^ほ丁^{てい}当^だでだ^だど。ほし
たら包^ほ丁^{てい}当^だでだ^だばんで、ばが^がつと真^ま中^{ちゆう}がら二^{ふた}つん割^{わり}つで、中^ながら、

「お^おげあ^あえ、お^おげあ^あえ」て、男^おお^おぼ^ぼごあ出^ではてきた^きた^たけ^けど。爺^ぢいど婆^ばんば、どでし
て、腰^{こし}拔^はがす^すどごであ^あつた^たど。爺^ぢあたま^まげで、

「あらあら^らつ。桃^{もも}がらお^おぼ^ぼごあ生^{せい}つできた^きち^ちや^やは、ま^まずま^まずたま^まげだ^だご^ごどもあ^ある
お^おんだ」

ていう^いけ^けど。ほ^ほんで婆^ばんばも、

「ほ^ほんてん^んたま^まげ^げた^たな爺^ぢい。こん^{こん}げ^げたま^まげ^げる^るご^ごどもね^ねあ^あお^おん」

て、二^{ふた}人^{にん}あ^あたま^まげ^げでは見^みつ^つだ^だけ^けど。ほ^ほのう^うづ^づん、婆^ばんば、

「な^なー爺^ぢい。お^おら^らだ^だ子^こ供^ごい^いね^ねあ^あく^くて、神^{かみ}さま^さま、欲^ほし^し欲^ほして願^{ねが}てい^いだ^だは^はげ^げあ^あえ、

神^{かみ}さま^さま授^{さづ}け^けで^でく^くつ^つだ^だな^なん^んね^ねあ^あべ^べが」て言^ゆた^たば、爺^ぢあ、

「^んだ^だな^な婆^ばんば、き^きつと神^{かみ}さま^さま授^{さづ}け^けで^でく^くつ^つだ^だあ^あだ^だべ。え^えが^がつ^つた^たえ^えが^がつ^つた」

て、二人あ喜でだけど。ほんで婆んば、

「んであ爺い。まず、名前つけねあんねあべ。ないてつけるやは」

て言^ゆたば、爺あ、

「んだなー。んであ桃がら生つだあだおん。桃太郎どでもつけんべ」

て言たば、婆んばも、

「んだな爺い。ほれあええ名前だ」

て、ほのおぼごさ、桃太郎ど名前つけで、大事んして育てでいだけど。

ほのおぼごあ、成長^{おがんな}も早えども、先ず荒れあおんで、えんっこさ入^へで育てい

だども、誕生^{むげあえどき}日あこねあうづ歩^{あり}ぐよんなて、誕生日あ過ぎだば、えんつこのし上

げるよんなたげどは。

ほうゆうおんだはげあえ、十位あなつど、ほごら近所のわらすたづあ相撲とたて、かなうおのあいねあぐなたけどは。ほうして、十二、三んなたば、爺あ田打^ぶちしてつど田打手伝い、畑してつど畑仕事手伝て、働ぐよんなたけど。

ほのあだり（その頃）、ほの村がら二里ばり離つた山奥に鬼あいで、城築でいだ

けど。ほうして、時々あだりの村々さ出はて来て、百姓達だがら米は取て行く、野菜は盗とてえぐで、ひでーおんであつたど。ほうして、あぐのはでにあ、娘こだどごまでさらて行くがつたど。んだおんださげあえ、村々の人達しだうあ、困て困て、殿さまさ退治してころて頼だども、殿さま退治へねあくていであつたど。

桃太郎あ、ほれ見でるおんだはげあえ、何時が退治してくんねあんねど思もていであつたど。ほうして、十七、八んなつど、爺いど婆んばどさ、どうが鬼退治ん行がへてころて頼だど。んでも爺いど婆んば、待で待で、お前の年であ、まだ早えあ。鬼こだに食つでしまうばんだはげあえ、もう二、三年あどにするて行がへねがつたど。

ほうして、桃太郎あ二十才はだづんなつど、まだ爺いと婆んばどさ、今度大丈夫だ、今度あ鬼こああだ何十匹いだて負けねあはげあえ、どうが鬼退治さへでころて、頼だど。ほんで爺いど婆んばも、今度だば大丈夫だべ、んであ行てこえて、許してくつただけど。

ほんで爺いと婆んば、んであ黍団子きみこしえあでやつさげあえて二人したりして黍団子

こしえあでくっただけど。桃太郎あ、ほの黍団子風呂敷さ入っで、ほれ背負て、大つき刀差して、鉢巻きして出がげだど。

ほうして、山越え山越え行たば、向うがらわんわんて犬あ来たけど。ほうして、桃太郎あそばさ来て、

「桃太郎さん、桃太郎さん。どごまで行くなです」て聞くけど。桃太郎あ、

「鬼の城さ鬼退治ん行ぐなだ」て言たば、

「んであ背中さ背負ったおのあなんですや」

て聞くおんだはげあえ、桃太郎あ、

「これあ一づ食うど、力倍べあえんなる黍団子だ」

て教へだけど。ほうしたば、犬あ、

「んだら、俺あどさもくんねが。俺も鬼退治ん行ぐはげ」つけど。ほんで桃太郎あ、

「んだが、んであくんねあんねべ。ほらっ」

ていうど、背負てだ黍団子一づくっただど。ほしたば犬あ、

「あー、これあんめあえ。なるほどこの黍団子食たば、力倍んなたよだ」

て、手足伸ばしたけど。

ほうして、桃太郎ど犬あ、ずうっと行たば、今度あ猿あ出はてきたけど。ほうして、きやつきやつてゆいながら、

「桃太郎さん。桃太郎さん。どごまで行くなですや」

て聞くけど。ほんで桃太郎あ、

「鬼の城さ鬼退治ん行くなだ」て言たば、猿あ、

「背中さ背負ったおのあ、なんですや」ていうはげあえ、

「これあ、一づ食うど力倍んなる黍団子だ」て言たど。ほしたば猿あ、

「ほう。ほれあええおんだな。んであ俺あどさも一づ食へねあが」

つけど。ほんで桃太郎あ、

「んだが、んだが」て、一づ食へだど。ほしたば猿あ、

「あー、んめあえ、んめあえ」て、ほの黍団子食いながら連で行たけど。

ほうして、桃太郎あ、犬と猿あどご連で、山越え山越え行たど。ほしたば今度あ、ばだばだど音して、雉あ飛で来たけど。ほうして桃太郎あ前さ下りで、

「桃太郎さん桃太郎さん、どさ行きあすや」て聞ぐけど。桃太郎あ、

「鬼退治ん行ぐなだ」て言^ゆたば、

「んであ、ほの背中さ背負ったおのあ、なんですよ」

て聞ぐけど。ほんで桃太郎あ、

「あー。これが、これあ一つ食うど、力倍^{べあえ}んなる黍団子だ」て言たば、

「ほんげあええおのだば、俺あどさも一つ呉^あんねあが。俺も鬼退治ん行ぐはげあえ」

つけど。ほんで、雉あどさも一つ食へだど。

ほうして、まだ大ど猿ど雉あどご連^つで、桃太郎あ、山越え山越え行たば、向うさ城あ見つけど。ほうすつど雉あ、

「先ず、俺あ行て見でくる」

ていうど、ばだばだ飛^とで行^えて、城のあだりぐるぐると廻^めて見で、帰^けえて来たけど。ほうして桃太郎さ、

「今だば、門番の鬼あ二匹はんていねあけ。あどあ、あつちやこつちや昼寝しつ

たはげあえ、丁度え。俺あ、まだ飛で行て、門番どこやつつけで、中がら門開げっさげあえ、直ぐ来てころ」

ていうど、まだばだばだど飛で行たけど。

ほんで桃太郎あ、犬ど猿あどご連で、直ぐ門どさ行たば、中で、

「痛であ痛であ、あー、眼つぶさったは」

て叫^さがぶ声あしたけど。ほうすつど中がら門の扉、雉あ、ぎぎーつと開げただ。桃太郎あ、

「ほら、行ごっ」

ていうど、皆走して行たど。

ほしたば、ほのものの音聞で他の鬼だあ、皆目醒まして、金棒かづで、門の方さ走して来たけど。ほしたば、犬あ鬼達^だの足だもええあ、手だもけつつだもかまわねあで、牙むえでかつて歩たど。ほうして、猿あひつかぐんだが、雉あつづぐんだがして暴っだおんだはげあえ、鬼あだ、痛であ痛であとて、ただ逃げ走して歩ぐばんだけど。桃太郎あ、ほんたおのさかまわねあで、奥の方さ行たば、鬼の大

将あ、赤げあえ顔^{つら}して走して来たけど。ほんで桃太郎ど一騎打づんなたけど。んだて桃太郎あ強^つえおんだおん。鬼の大將あ、はーはーして息きらは、

「降参です。降参です」

て、手つえで謝たけどは。ほんで桃太郎あ、

「きさまらのようにえぐねあ奴らいねあ。城さ火つけで焼えでしもうはげあえ、どさだりけづかれ」

て言^ゆたど。ほうして、城の宝物みな分取て、犬ど猿ど雉あどさ背負わへで、城さ火つけで焼き払て、帰えて来たけど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(話者 高橋タケヨ)

及位の昔話（四）

話著者 高橋良雄

編 武田 正・山形民話の会

南陽市赤湯三、一八〇—四

昭和五十五年十二月三十日 発行

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年十月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四